千葉市大膳野北遺跡

－千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1982

千葉県商工労働部
財団法人 千葉県文化財センター

千葉市大膳野北遺跡

－千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1982

千葉県商工労働部
財団法人 千葉県文化財センター

序　文

千葉県では身体障害者雇用促進を図るため、昭和54年８月千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業を計画し、建設予定地として千葉市の東南部，大金沢の地を選定しました。

しかし、大金沢周辺には、大膳野北貝塚、六通遺跡をはじめ、北生実、上赤塚、椎名崎古墳群など縄文時代から古墳時代にいたる数多くの埋蔵文化財が所在することで知られており、当訓練校建設予定地にも埋蔵文化財の所在することが認められました。

そこで、県教育委員会では埋蔵文化財の取扱いについて県商工労働部（職業訓練課）と協議を重さねた結果、予定地内の埋蔵文化財については、記録保存の措置を講ずることとし、（財）千葉県文化財センターを調査機関として指定しました。

これを受けて、当センターは発掘調査の実施について県商工労働部（職業訓練課）と詳細な打合せを行い、昭和55年度に確認調査、昭和56年度に本調査を実施しました。

その結果、縄文時代、古墳時代等の埋蔵文化財が検出され、当地区の原始古代の一端を知ることができたわけであります。

刊行に当たり、本報告書が単に学術書として利用されるにとどまらず、社会教育の場で活用されることを願ってやみません。

最後に、酷寒、炎天下、発掘調査に従事した調査研究員及び調査補助員並びに調査から本報告書刊行に至るまで御協力いただいた千葉県商工労働部その他関連機関に厚くお礼申しあげる次第です。

昭和56年９月30日

財団法人千葉県文化財センター

理事長　今井　正

凡　例

1．本書は千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は千葉県商工労働部（職業訓練課）の依頼をうけ、千葉県教育委員会の要請、指導のもとに、(財)千葉県文化財センターが実施した。調査は確認調査と本調査の２次にわたり、確認調査は昭和56年１月５日～昭和56年２月28日（整理期間含む）、本調査（8,022m²)は昭和56年４月１日～昭和56年６月15日に実施し、その後整理作業を９月30日まで行った。

3．本遺跡は千葉市大金沢町470他に所在する。遺跡コードは201－024である。

4．調査は千葉県教育委員会（文化課）の指導の下に次の組織により実施した。

調査部長　白石竹雄

部長補佐　栗本佳弘　(56.1.5～56.3.31)

〃　中山吉秀　(56.4.1～56.9.30)

班　長　山田常雄　(56.1.5～56.3.31)

〃　西山太郎　(56.4.1～56.9.30)

主任調査研究員　深澤克友(56.4.1～56.9.30)

調査研究員　白石　浩

5．整理作業は深澤・白石(浩)が行った。

6．本書の執筆、編集は深澤の協力を得て白石(浩)が行った。

7．本書における遺構・遺物の実測図は、各種目ごとに下記のとおり縮尺を統一してあるが、作図の都合で統一に欠けるものがある。それらは挿図中に明記してある。

古墳　全体平面図　1/120、主体部平面図・側面図・土層断面図　1/40、

方形周溝状遺構　平面図　1/80、土層断面図　1/40

土壙　平面図・土層断面図　1/40

溝　平面図　1/80、土層断面図 1/40

遺物　1/2　（断面スクリントーンは須恵器）

8．本遺跡の出土遺物及び実測図、写真等一切の記録類は、県立房総風土記の丘に保管の予定である。

目　次

序文
凡例

I　はじめに
1．調査の経過 …… 1
2．遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
3．調査の概要 …… 5
II　検出した遺構及び遺物
1．縄文時代の遺物 …… 8
2．古墳とその遺物 …… 10
3．方形周溝状遺構 …… 23
4．土壙・溝・ピット列 …… 27
III　小結 …… 33

挿　図　目　次

第１図　大膳野北遺跡周辺地形図 …… 2
第２図　大膳野北遺跡地形図 …… 6
第３図　大膳野北遺跡遺構配置図 …… 7
第４図　縄文時代遺物実測図 …… 9
第５図　古墳周溝実測図 ……11
第６図　古墳石室展開図 ……15
第７図　古墳石室平面図 ……16
第８図　古墳石室側面図・正面図 ……17
第９図　古墳石室裏込め土層断面図 ……18
第10図　古墳石室掘り方平面図 ……20
第11図　古墳出土遺物実測図 ……22
第12図　方形周溝状遺構（002）実測図 ……24
第13図　方形周溝状遺構（003）実測図 ……26
第14図　土壙（007）実測図 ……28
第15図　溝（004）実測図 ……29
第16図　溝（005）実測図 ……30
第17図　溝（006）実測図 ……31

図　版　目　次

図版１．遺跡全景
　　１調査前近景（南東から）
　　２調査前遠景（南から）
図版２．古墳
　　１全景（石室内埋土除去後）
　　２周溝（西側）
図版３．古墳
　　１石室
　　２羨道裏込め状況
図版４．古墳
　　１袖石背後の裏込め状況

2 右側石背後の裏込め状況
図版５．古墳
1 全景（石室検出後）
2 石室全景
図版６．古墳
1 石室全景（奥壁から）
2 左側石と袖石の接合状況
図版７．古墳
1 石室掘り方全景
2 調査後全景（南より）
図版８．方形周溝状遺構（002）
1 全景
2 東側周溝
図版９．方形周溝状遺構（003）
1 全景
2 中央部土壙
図版10．土壙・溝
1 土壙（007）全景
2 溝（006）全景
図版11．溝（004）
1 全景
2 土層断面
図版12．遺物

I. はじめに

1. 調査の経過

千葉県では身体障害者雇用促進の円滑化を計ることを目的として、昭和54年８月千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業が立案された。その後、計画の具体化に伴い同訓練校建設予定地は、千葉県農業センター内の農村青年研修館南側の約10,000㎡に及ぶ敷地が選ばれた。

しかし、この敷地西側には約 600ヘクタールに及ぶ膨大な日本住宅公団東南部ニュータウン建設予定地があり、当文化財センターでは同用地内に所在する数多くの埋蔵文化財を発掘調査している。特に本遺跡の南に隣接する大膳野北貝塚（昭和55年12月～昭和56年２月調査）では、古墳２基、縄文時代・歴史時代の住居跡等が検出されている。

これらのことから、当訓練校建設予定地を含む周辺一帯の台地に、古墳群等の埋蔵文化財が所在するものと予想された。

このため千葉県教育委員会ではその取扱いについて、千葉県商工労働部と慎重に協議した結果、建物敷地部分約8,000㎡については記録保存の措置も止むを得ないとの結論に達し、調査機関として(財)千葉県文化財センターを指定した。

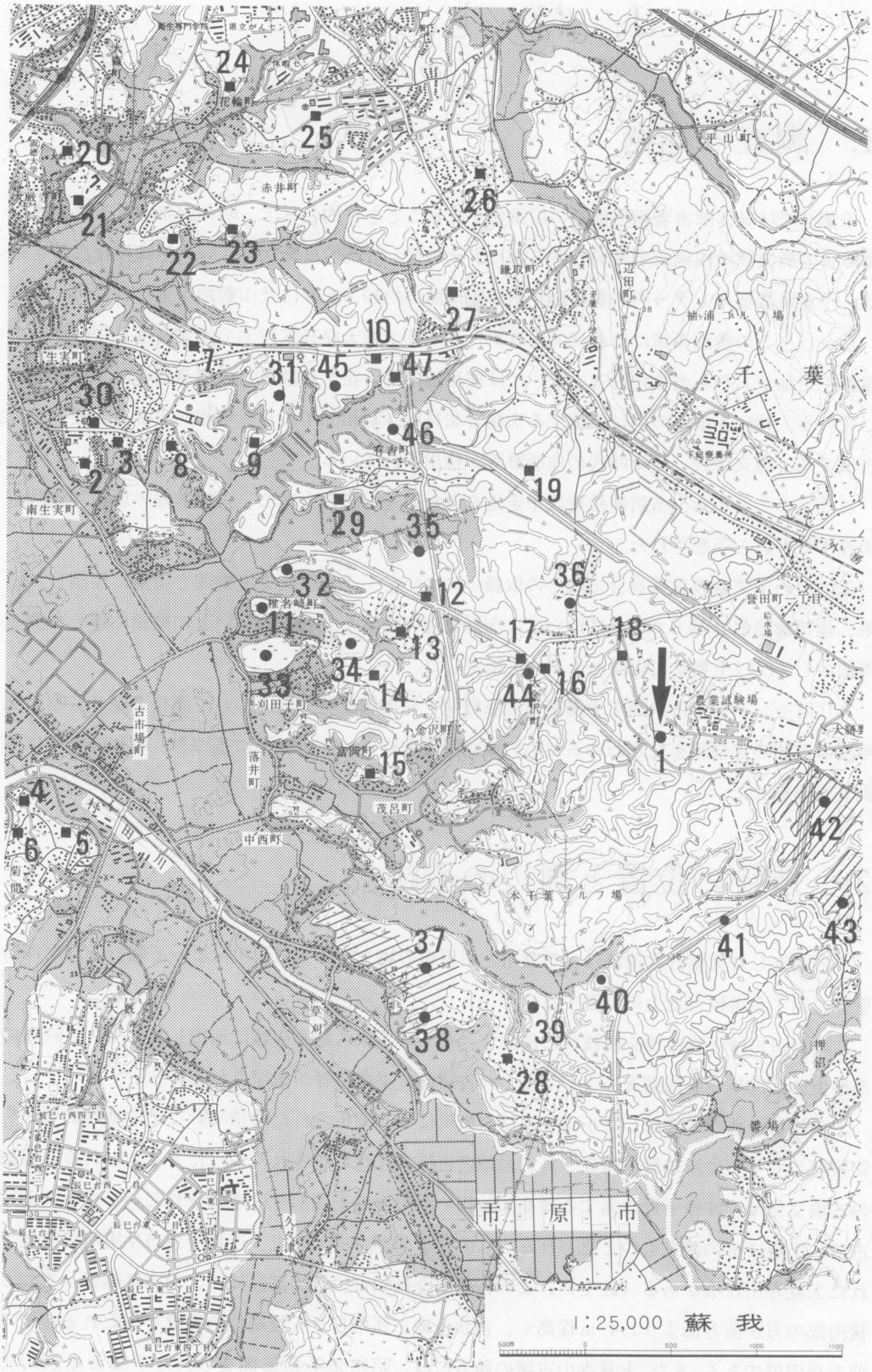
文化財センターでは県商工労働部等関係機関と発掘調査の実施について調整を図り、昭和55年度に遺跡の性格等を見きわめるための確認調査を行い、その結果に基づき、昭和56年度に本調査を実施した。

2. 遺跡の位置と周辺の遺跡

今回調査した大膳野北遺跡は、千葉市と市原市の境を流れる村田川によって開析された沖積平野に面する洪積台地上に位置する。

この村田川は下総台地を樹枝状に浸蝕し、多くの舌状台地を複雑に形成しており、これらの台地上には近年の発掘調査によって多くの古墳群、集落跡等が確認されている。

この様な台地内に浸蝕した小支谷及び村田川により開析された沖積平野などの地理的要因を背景としてその生産基盤が確立され、当地の古墳文化が形成されていったと考えられる。当地の古墳文化は、沖積平野に面する標高30ｍ程の洪積台地先端部分に造営されたいくつかの前期古墳の出現にその源をもつと思われる。この様な前期古墳として、近年千葉市生実町で発見された大覚寺山古墳がある（註１）。この古墳は全長62ｍ、後円部径30ｍ、前方部幅25ｍを測り、後円部の方が前方部より1.4 ｍ程高く、舌状台地を利用した５世紀代の造営と思われる古式の前方後円墳である。また、大覚寺山古墳の西方には、昭和33年発掘調査された千葉市生実町七



第1図　大膳野北遺跡周辺地形図

廻塚古墳がある（註２）。主体部(木棺と思われる)からは直刀、石製模造品、滑石製石釧、変形神獣鏡等の豊富な遺物が出土しており、５世紀代の所産とされている。

一方村田川南岸下流域には、『国造本記』に記されたいわゆる菊麻国造の墓所と推定される菊間古墳群が位置する。群中には新皇塚古墳、東関山古墳、姫塚古墳等の前方後円墳がある。この古墳群の造営は４世紀後半以前にさかのぼるといわれる（註３）。

こうした前期古墳群を形成した在地集団による河川氾濫原の開発といった灌漑組織の維持発展を通して経済基盤が確立され、各々の古墳文化領域が、小支谷奥部の舌状台地といった周辺地域へ拡散し、変化していったものと考えられる。そのひとつの所産として、本遺跡の古墳群としての性格を村田川流域の古墳群全体の動きの中でとらえる必要があるだろう。村田川流域にはこうした４～５世紀代の前期古墳の出現後に、数多くの後期古墳群が、小支谷の舌状台地を中心に成立している。次に本遺跡をとりまくこうした古墳群とともに、その周辺の集落跡についても概観することにする。

まず、村田川北岸下流域の北側から各小支谷を中心としてみることにする。大覚寺山、七廻塚各古墳の北側赤井支谷と南側赤塚支谷によりはさまれた洪積台地上には、北生実古墳群、八人塚古墳群、上赤塚古墳群、生浜古墳群（兼塚古墳群）（註４）が位置している。この中では生浜古墳群が当センターによって発掘調査され、円墳を中心に６基の古墳が確認されている。これらの古墳は出土遺物から７世紀末あるいはそれ以降に位置づけられている。さらに生浜古墳群の西方約 500mには、有吉遺跡（註５）が位置し、鬼高期の住居跡50軒をはじめ176 軒の住居跡が発掘調査されている。こうした集落跡と周辺古墳群との有機的関係を考えるうえで重要な遺跡である。

１．大膳野北遺跡	２．七廻塚古墳	３．大覚寺山古墳	４．新皇塚古墳
５．姫塚古墳	６．東関山古墳	７．北生実古墳群	８．八人塚古墳群
９．上赤塚古墳群	10．生浜古墳群	11．伯父名台遺跡	12．椎名崎Ａ古墳群
13．椎名崎Ｂ古墳群	14．椎名崎Ｃ古墳群	15．富岡古墳群	16．ムコアラク遺跡
17．小金沢古墳群	18．六通古墳群	19．馬ノ口古墳群	20．大厳寺古墳
21．愛宕古墳	22．赤井古墳群	23．榎作古墳群	24．池田古墳群
25．高根田古墳群	26．菱名古墳群	27．鎌取古墳	28．草刈古墳群
29．扇田古墳	30．瓢箪塚古墳群	31．有吉遺跡	32．椎名崎遺跡
33．刈田子台遺跡	34．今台遺跡	35．木戸作遺跡	36．六通遺跡
37．草刈遺跡	38．六ノ台遺跡	39．中永谷遺跡	40．ばあ山遺跡
41．野馬堀遺跡	42．押沼第一遺跡	43．押沼第二遺跡	44．御塚台遺跡
45．高沢遺跡	46．有吉南遺跡	47．南二重堀遺跡	

この台地の南方イズミ谷津と大金沢町付近の小支谷にはさまれた台地上にも数多くの古墳群、集落跡がある。イズミ谷津の谷頭のくびれ部の舌状台地最先端に、西ノ原古墳群があり4基の古墳が調査されている。この古墳群は46軒の鬼高期の住居跡を中心に約 150軒の住居跡が発見された椎名崎遺跡の調査により発見されたものである（註6）。また、この台地中央の東にのびる小谷津の先端部には、椎名崎古墳群が位置する。この古墳群はその立地から三つの支群にわけて考えられているが、そのうち前方後円墳を中心に8基よりなるA支群が発掘調査されている（註7）。また、この古墳群北側舌状台地には鬼高期の住居跡20軒よりなる木戸作遺跡がある（註8）。A支群の西方には、かって人物埴輪を出土した前方後円墳（人形塚古墳）を中心としたB支群が位置し、B支群と小支谷によって隔てられた南側台地には、前方後円墳1基、円墳11基よりなるC支群が位置する。更にこの南方 500mには、円墳4基よりなる富岡古墳群がある。これらの古墳群の西方の台地先端部には、土師器の散布地として伯父名台遺跡、刈田子台遺跡、今台遺跡が確認されている。

この椎名崎古墳群の東方約 800mには、前方後円墳を中心として9基の方墳より構成されるムコアラク古墳群（註9）、帆立貝式古墳1基、円墳1基を含む6基の古墳よりなる小金沢古墳群が位置する。これらの古墳群の周辺では、六通遺跡、御塚台遺跡が調査されている(註10)。

大膳野北遺跡はこのムコアラク古墳群より更に西南約 800m程に位置する。遺跡のすぐ南には大膳野北貝塚があり、当方墳とほぼ同規模・同形態の方墳が2基調査されている。当遺跡の方墳とともにこの地域の一古墳群を形成するものと考えられる。

このように村田川北岸下流域には、小支谷のまわりに形成された多くの舌状台地を中心に古墳群と集落跡が何らかの関連をもつかのように位置している。また、小支谷にはさまれた台地が、文化的、経済的な単位としてとらえられる可能性もある。村田川流域の古墳文化を考える際、大きな時間的、地域的な変化を巨視的にとらえると同時に、このような小支谷にはさまれた小さな台地を単位とした微視的な考え方がこれからは必要であろう。その中で当遺跡のような小支谷からやや離れた台地上の小古墳群のあり方を検討すべきだろう。

註1　大塚初重「大覚寺山古墳の測量調査について」1971

註2　武田宗久「千葉市七廻塚古墳」日本考古学年報11　1962

註3　斉木　勝、種田斉吾他「市原市菊間遺跡」(財）千葉県都市公社　1976

註4　種田斉吾、谷　旬他「千葉東南部ニュータウン　四　生浜古墳群」
(財）千葉県文化財センター　1977

註5　種田斉吾、阪田正一他「千葉東南部ニュータウン　三、五　有吉遺跡第1、2次」
(財）千葉県文化財センター　1975、1978

註6　栗本佳弘、上村淳一他「千葉東南部ニュータウン　六　椎名崎遺跡」
(財）千葉県文化財センター　1979

註7　栗本佳弘、沼沢　豊他「千葉東南部ニュータウン　一　椎名崎古墳群第1次」
(財)千葉県文化財センター　1975

註8　三森俊彦、郷田良一他「千葉東南部ニュータウン　二、七　木戸作遺跡第1、2次」
(財)千葉県文化財センター　1975、1979

註9　田阪　浩、白井久美子他「千葉東南部ニュータウン　八　ムコアラク遺跡、小金沢古墳群」(財)千葉県文化財センター　1979

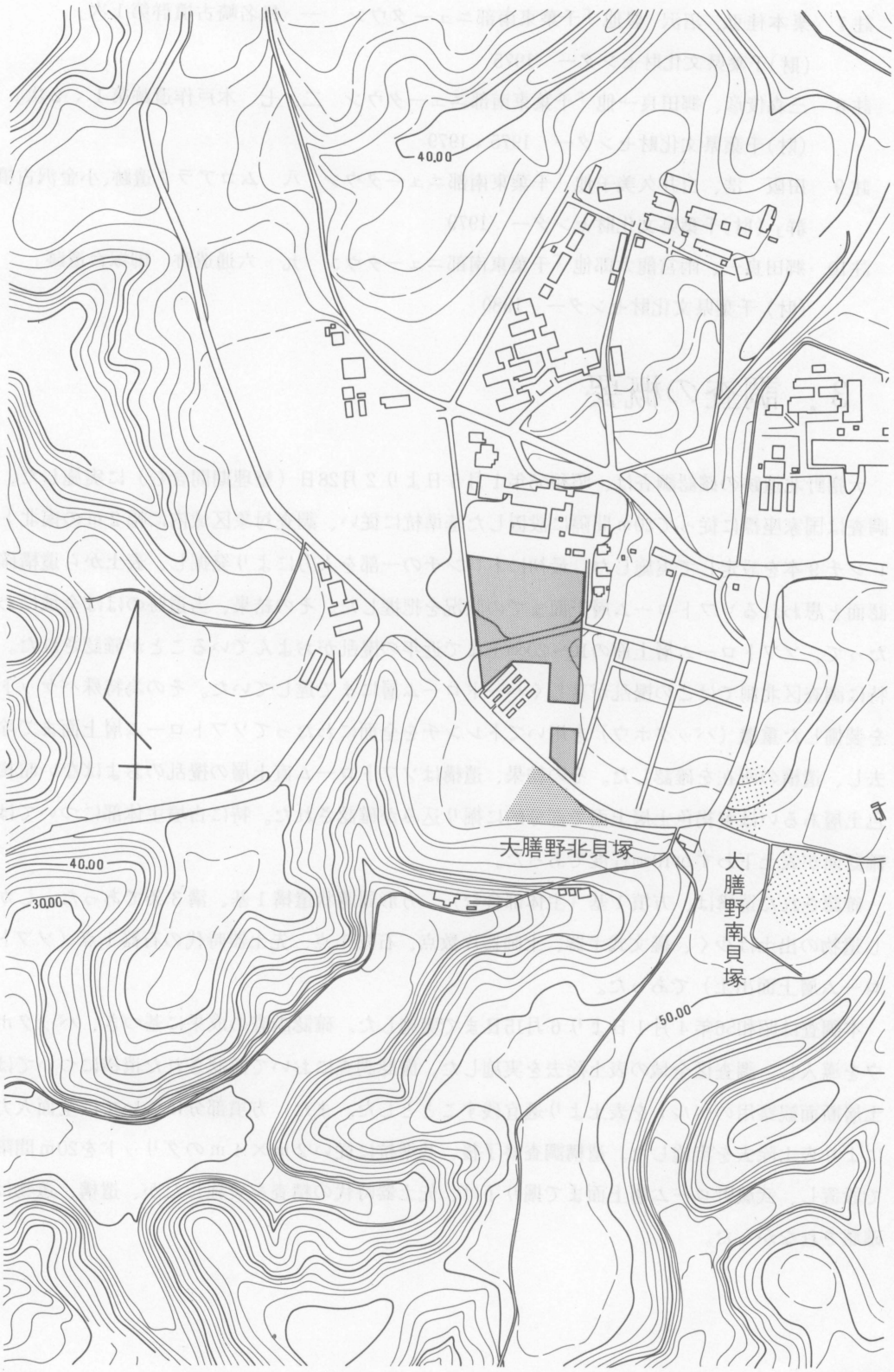
註10　郷田良一、雨宮龍太郎他「千葉東南部ニュータウン　九　六通遺跡　御塚台遺跡」
(財)千葉県文化財センター　1980

3．調査の概要

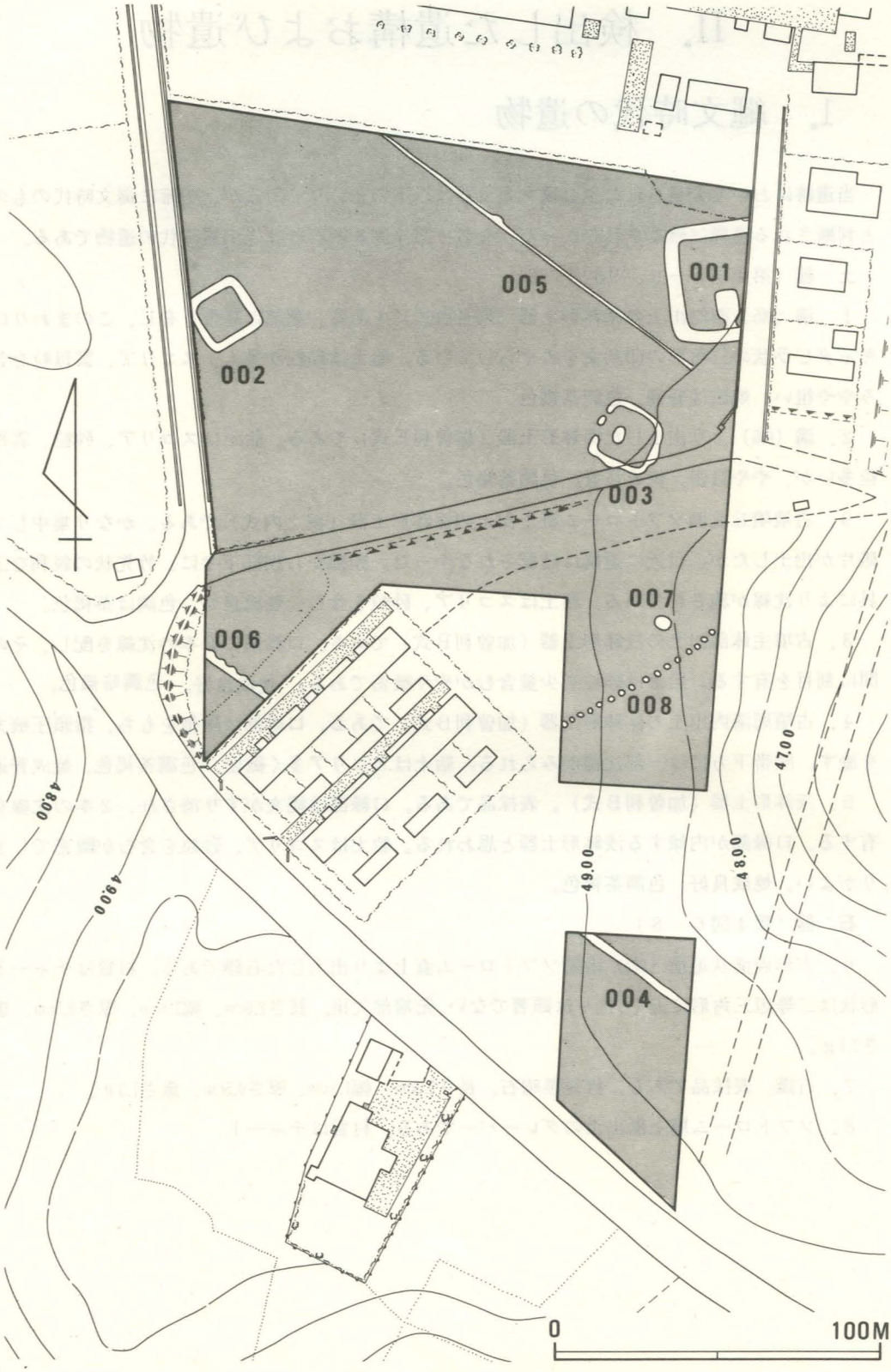
大膳野北遺跡の確認調査は、昭和56年1月5日より2月28日（整理期間含む）に実施した。調査は国家座標に従って20m間隔に設置した基準杭に従い、調査対象区域内に幅2mの南北トレンチ9本を設定して実施した。最初にトレンチの一部を人力により発掘し、表土から遺構確認面と思われるソフトローム層上面までの状況を把握した。その結果、当遺跡のほぼ全域にわたって、ソフトローム層上面の10～20cm上まで近年の攪乱がおよんでいることが確認された。特に調査区北側ではこの攪乱が著しくハードローム層にまで達していた。その為特殊バケットを装備した重機（バックホウ）を用いてトレンチを全面にわたってソフトローム層上面まで除去し、遺構の所在を確認した。その結果、遺構はソフトローム直上層の攪乱のおよばない暗褐色土層あるいは黄褐色土層上面で部分的に掘り込みが確認された。特に古墳主体部については、確認面が表土下わずか10cm程度であった。

確認された遺構は、方墳1基（主体部含む）、方形周溝状遺構1基、溝3条であった。しかし遺物の出土は少く、縄文式土器、土師器片数点、石鏃1点、先土器時代の石器1点（ソフトローム層上面出土）であった。

本調査は昭和56年4月1日より6月15日まで実施した。確認調査の成果に基づき、バックホウを導入し、調査区全域の表土除去を実施した。確認調査において確認された遺構については、土層断面観察用のベルトを表土より適宜残すこととした。また、方墳部分については全面人力により表土除去を実施した。遺構調査終了後、基準杭に従い2m×4mのグリッドを20m間隔で設置し、武蔵野ローム層上面まで掘り下げ、先土器時代の精査を実施したが、遺構、遺物は確認されなかった。



第２図　大膳野北遺跡地形図(1/5,000)



第３図　大膳野北遺跡遺構配置図(1/1,000)

II. 検出した遺構および遺物

1. 縄文時代の遺物

当遺跡において発見された主な縄文式土器は以下のとおりであるが、明確に縄文時代のものと判断される遺構は確認されなかった。なお、第４図８の石器は先土器時代の遺物である。

土　器（第４図１－５、９）

１．溝（005）西側出土の深鉢形土器（阿玉台式）である。胴部に隆帯を有し、このまわりにキャタピラ状の三角形の印刻文をめぐらしている。胎土は砂粒が多く、スコリア、雲母粒を含みやや粗い。焼成は普通。色調茶褐色。

２．溝（005）より出土した深鉢形土器（加曽利Ｅ式）である。胎土はスコリア、砂粒、雲母粒多いが、やや緻密。焼成良好。色調茶褐色。

９．古墳墳丘北側ソフトローム直上出土の深鉢形土器（堀之内式）である。かなり集中して破片が出土したが、付近に遺構は確認されなかった。頸部から胴部下半に、竹先状の鋭利な工具により沈線が施されている。胎土はスコリア、砂粒を含む、焼成良好。色調は茶褐色。

３．古墳主体部出土の浅鉢形土器（加曽利Ｂ式）である。口縁部に２本の沈線を配し、その間に刻目を有する。胎土は砂粒を少量含むがやや緻密である。 焼成良好。 色調暗褐色。

４．古墳周溝内出土の深鉢形土器（加曽利Ｂ式）である。口縁部に隆帯をもち、指頭圧痕文を施す。隆帯下方には一部沈線がみられる。胎土はスコリア多く緻密。色調茶褐色。焼成普通。

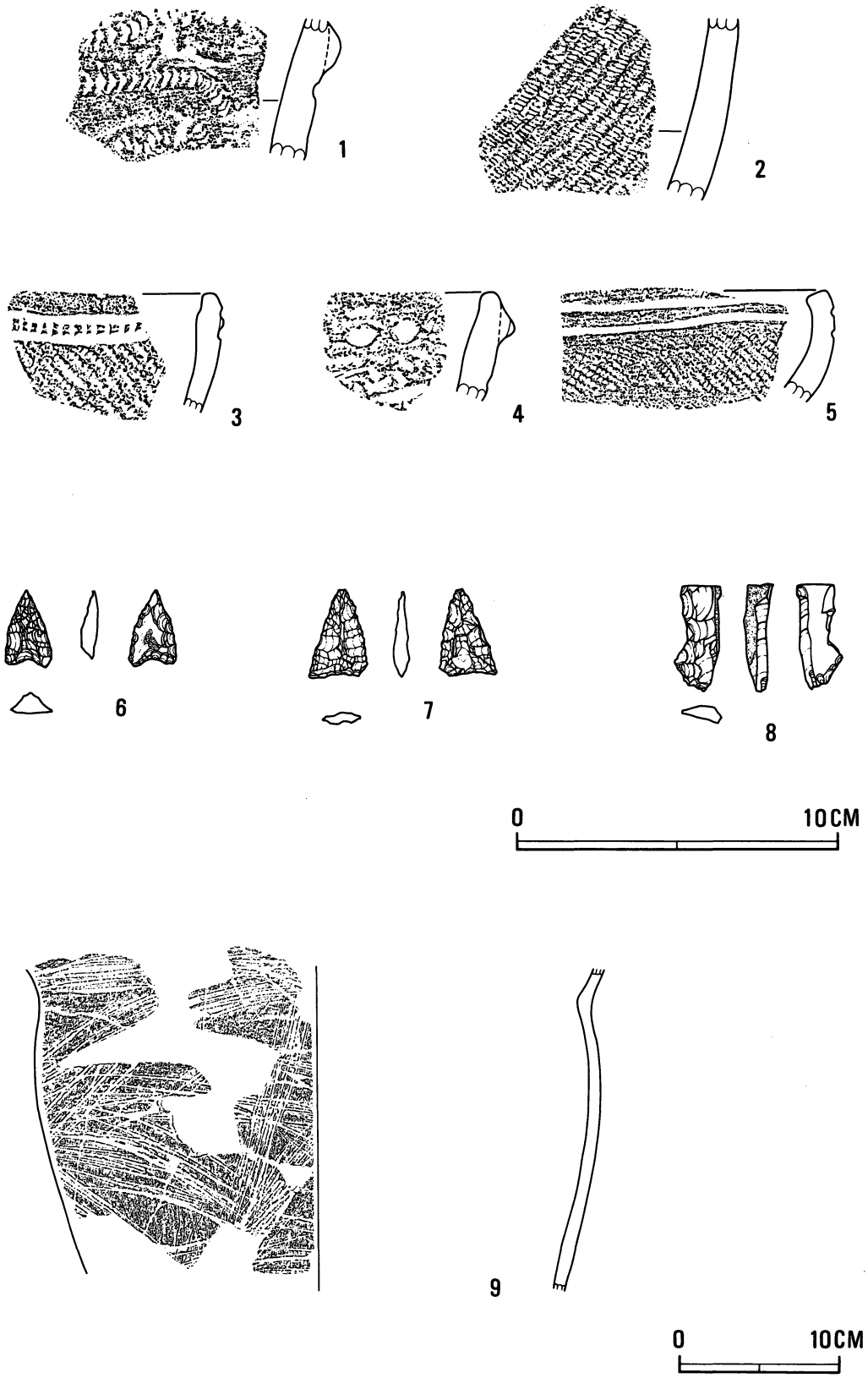
５．浅鉢形土器（加曽利Ｂ式）。表採品である。口縁部は縄文がすり消され、２本の沈線を有する。口縁部が内傾する浅鉢形土器と思われる。胎土はスコリア、砂粒を含むが緻密でしまりがよい。焼成良好。色調茶褐色。

石　器（第４図６－８）

６．方形周溝状遺構（002）南側ソフトローム直上より出土した石鏃である。材質はチャート。形状は二等辺三角形に近く、抉りは顕著でない。先端部欠損。長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ2.1ｇ。

７．石鏃。表採品である。材質黒曜石。長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.3ｇ。

８．ソフトローム層上面出土のグレーバーである。材質はチャート。



第4図　縄文時代遺物実測図(1/2, 1/4)

2．古墳とその遺物

位置と現況

遺跡全体は標高49ｍ程の西に広がる台地に所在しており、当古墳はその東端に位置する。古墳の東側には、当台地と標高差５ｍ程度のゆるやかな谷津が南に入りこんでいる。さらに南方150ｍ程の台地南端に大膳野北貝塚の古墳群が所在する。この古墳群の南には、標高差27～28ｍを測る谷津が南から北へのびている。

当古墳東側半分は調査対象区外であるため、主体部を含む西側半分を調査した。墳丘は調査前にはまったく確認されなかったが、地元住民によると当農業センター建設以前には、この付近にいくつかの塚が存在したとのことである。おそらく当古墳は大膳野北貝塚で検出された古墳とともに、西に広がる標高49ｍ程度の台地上に所在する古墳群の一部を形成するものと思われる。

調査の方法

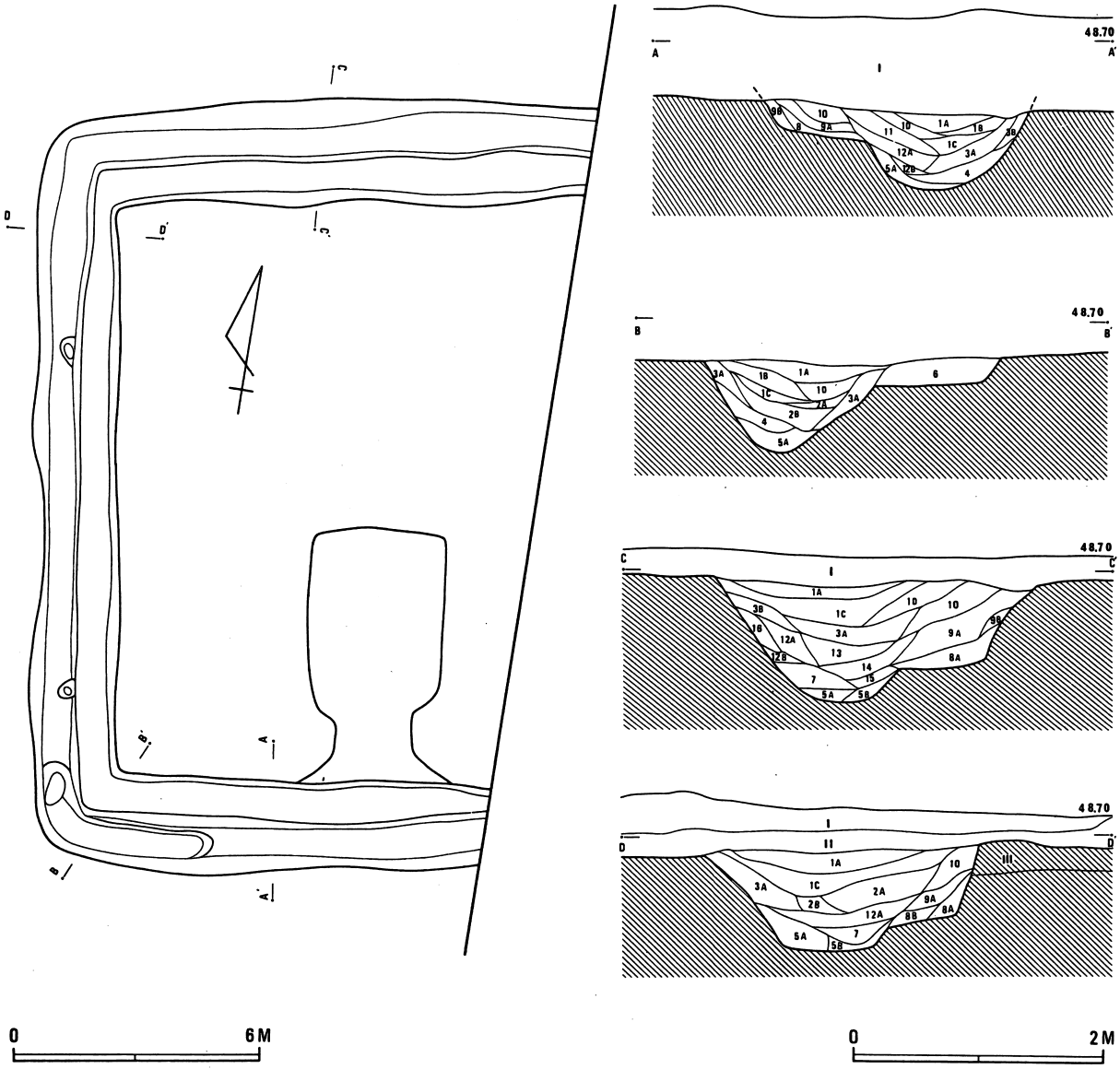
墳丘部は確認調査の成果に基づき全面人力により、主体部の検出された暗褐色土層まで除去した。周溝部分は、西側周溝のみ確認調査時のトレンチ内にほぼ入ってしまったため、土層観察部分を除いてソフトローム層上面まで除去した。全体に遺構は現代の攪乱が激しく、遺存状況は良くないと判断された。

周溝完掘後写真撮影、実測を実施し、主体部内の埋土を除去した。主体部、周溝ともに遺物はほとんど検出されなかった。その後、主体部は周溝側より順次裏込め状況を観察、記録しつつ石室全体を露呈させた。この際墳丘全体の暗褐色土層、黄褐色土層も全面ソフトローム層上面まで掘り下げた。石室部分は内部の展開図、外部の側面図、正面図及び平面図等で記録し写真撮影を行った。その後石材を除去し掘り方の平面図を作成し、写真撮影を行ない調査を終了した。

墳丘と周溝

本古墳は主軸をほぼ南北にもち、一辺が約18ｍのほぼ正方形を呈する方墳である。墳丘は遺存せず、石室掘り方が確認された暗褐色土層も耕作等により攪乱を受けていた。この攪乱は一部ソフトローム層にまで及んでいた。このため旧表土、墳丘、封土等に関しては不明である。

周溝は、墳丘部側にテラス状の段を有し、全周するものと思われる。このテラス状の段は、下端で幅70～100cm、周溝の底面からの高さ20～40cmを計る。石室前庭部分では、このテラス状の段はゆるやかで、石室閉塞石までほぼ平坦となる。この周溝のテラス状遺構は、周辺の古墳にはその類例がみられないものである。また、このテラスは周辺の古墳において確認されている、封土形成のための墳丘の周溝外及び墳丘周溝側地山削平と同じ目的をもったものと考えられる。



第５図　古墳周溝実測図(1/120, 1/40)

古墳（003）周溝土層説明

1 A．黒色土層　ローム粒を微量含む。
1 B．黒色土層　1 Aよりローム粒多く含む。
1 C．黒色土層　1 Aより粘性が強い。
1 D、黒色土層
2 A．黒褐色土層　ローム粒を少量含む。
2 B．黒褐色土層　2 Aよりローム粒やや多く含み、粘性が強い。
3 A．暗褐色土層
3 B．暗褐色土層　ソフトローム少量含む。
4．　黄褐色土層　ソフトローム多量に含む。
5 A．黄褐色土層　ロームブロックを多量に含む。
5 B．黄褐色土層　5 Aよりロームブロックを多く含み、しまりが強い。
6．　暗褐色土層　3 Aよりやや黒色土を多く含む。
7．　黒褐色土層　ローム粒を少量含む。やや粘性強く、しまりが強い。
8．　黒褐色土層　下面に少量のハードロームブロックを含む。
9 A．黒褐色土層　しまりが強く、黒色土ブロックを含む。
9 B．黒褐色土層　9 Aにローム粒を含む。
10．　黒色土層　しまりが強く、ローム粒を少量含む。
11．　黄褐色土層　ローム粒を多量に含む。
12A．暗褐色土層　11よりローム粒少い。
12B．暗褐色土層　ローム粒をほとんど含まない。
13．　黒褐色土層　2 Aよりやや黒色味が強い。
14．　暗褐色土層　粘性が強く、ローム粒を多量に含む。
15．　暗褐色土層　14よりローム粒を多く含む。

Ⅰ．　攪乱、耕作土
Ⅱ．　暗褐色土層
Ⅲ．　黄褐色土層（ソフトローム漸移層）

周溝全体の幅は上端で２～2.5ｍ、掘り込みの深さは暗褐色土層からで70～80cmを測る。南西コーナーにハードロームを敷きつめ、踏み固められた状態の10cm程度の落ち込みが検出されたが、全体に断面は鍋底状で平坦である。

主体部

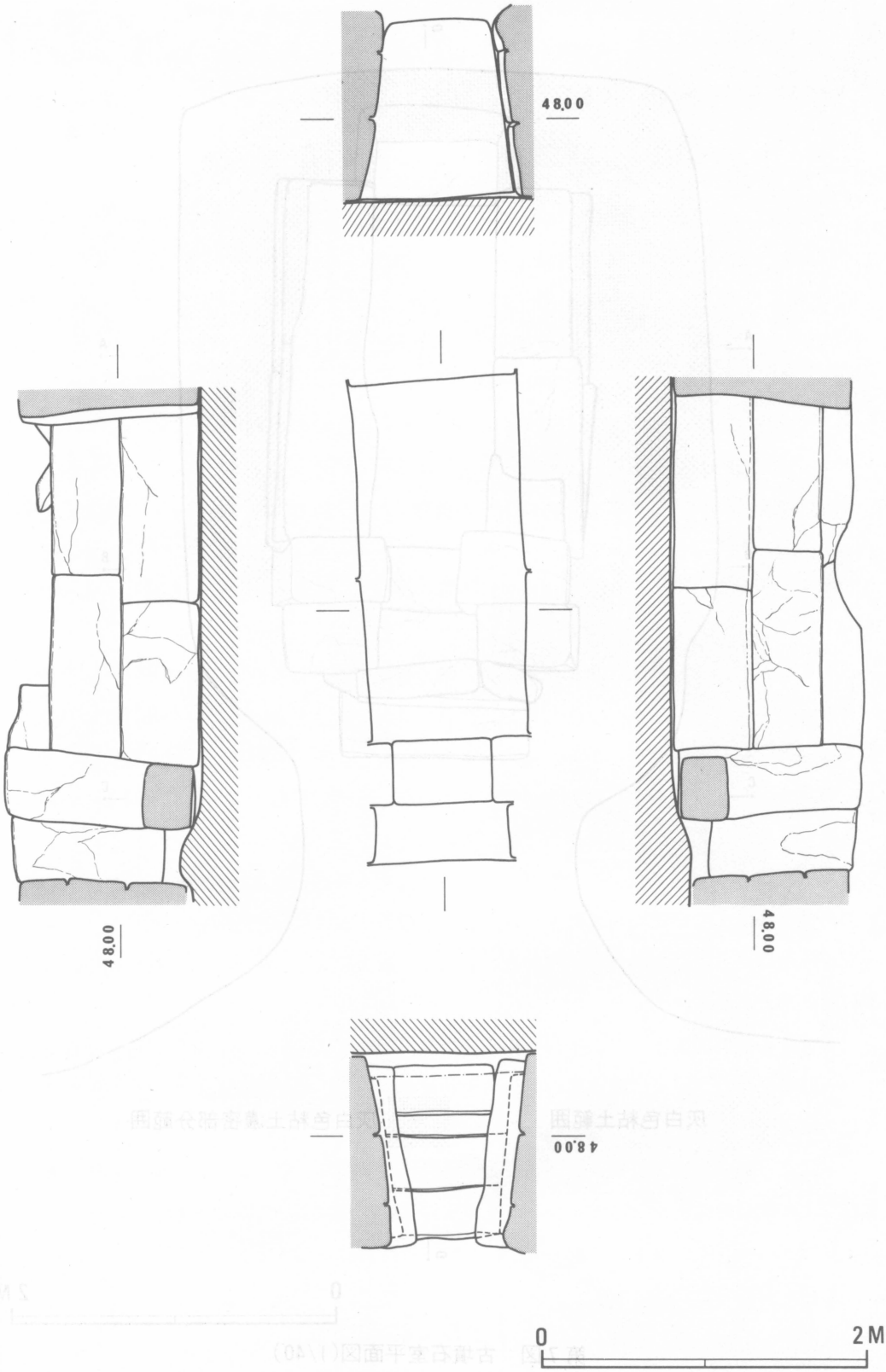
主体部は、南側周溝ほぼ中央に開口する横穴式石室である。土壙はほぼ原形をとどめ、隅丸の長方形である。前庭部は幅がせばまり、周溝の内側ステップ状の段を更に深く掘り込んでいる。上端で長さ（Ｎ－Ｓ）４ｍ、最大幅（Ｅ－Ｗ）3.4ｍ、暗褐色土層からの掘り込みの深さ1.3ｍを測る。前庭部は長さ（Ｎ－Ｓ、周溝テラス状段を含む）３ｍ、幅1.8ｍ、テラス状の段を東西に深く掘り込んだ際の上端での幅4.5ｍを測る。

掘り方で注目される点として、奥石、側石及び玄室袖石の基底面に、深さ３～５cm、幅20～30cm、長さ60cm程の掘り込みがみられることがあげられる。この掘り込みの中には、各石材の掘り方基底面に充填されたローム粒主体の黄色土が認められた。これらの掘り込みは各石材の設置位置を掘り方掘削段階であらかじめ決めるためのものではないだろうか。また、框石、玄室袖石の位置で基底部に10～15cm程の段を有している。前庭部中央にやや盛りあがりを有するが、全体に平坦である。

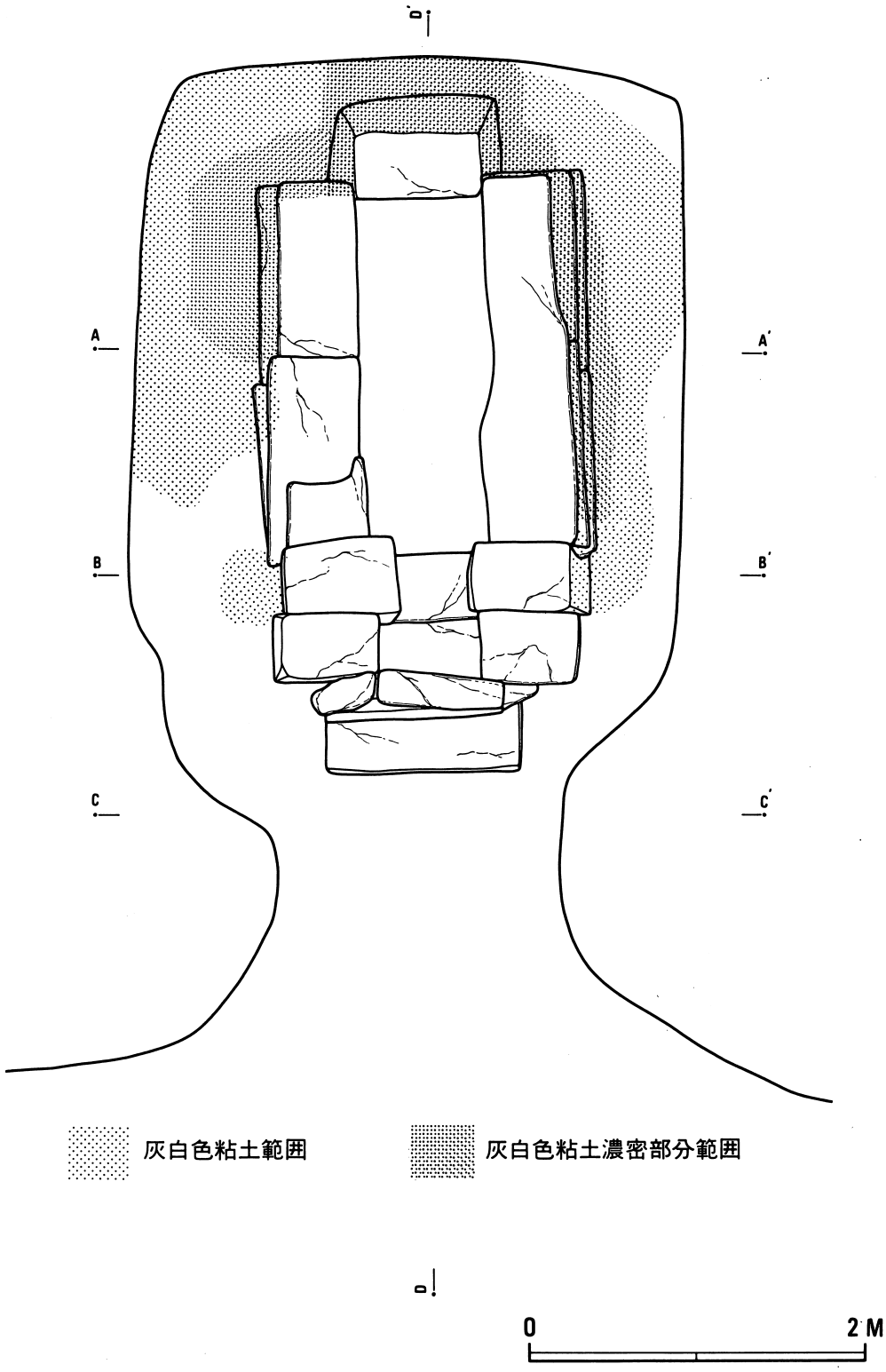
裏込め状況は、玄室中央、玄室袖石中央、閉塞石手前で各々横断面、奥壁背後、周溝側から閉塞石の各々縦断面で観察し、記録した。裏込め状況は、まず各々の石材の基底部にソフトローム粒主体の黄色土を敷いている。その後奥石、框石、玄室袖石が順次配置され、更に玄室側石１段目が左右２つずつすえられる。側石のまわりには灰白色粘土が水平に１層あるいは２層にわたって埋め込まれ、１段目側石上面まで、ロームブロックを含む黄褐色土が埋め込まれる。次に２段目側石が配置され、この外側に灰白色粘土を１層あるいは数層にわけて、粘土が外側に傾斜する様にくさび状に埋め込まれる。更に２段目上面にはほぼ水平に灰白色粘土が掘り方一面に配置される。この後に３段目側石、天井石と順次配置し、周囲には灰白色粘土が埋め込まれたと考えられる。

この様に石材の設置とともに灰白色粘土を多量に用いて裏込めがなされている。奥壁背後には、天井石をおおうように厚い灰白色粘土層が確認された。前庭部分もハードローム粒を主体とした黄褐色土を中心に裏込めが行われていた。

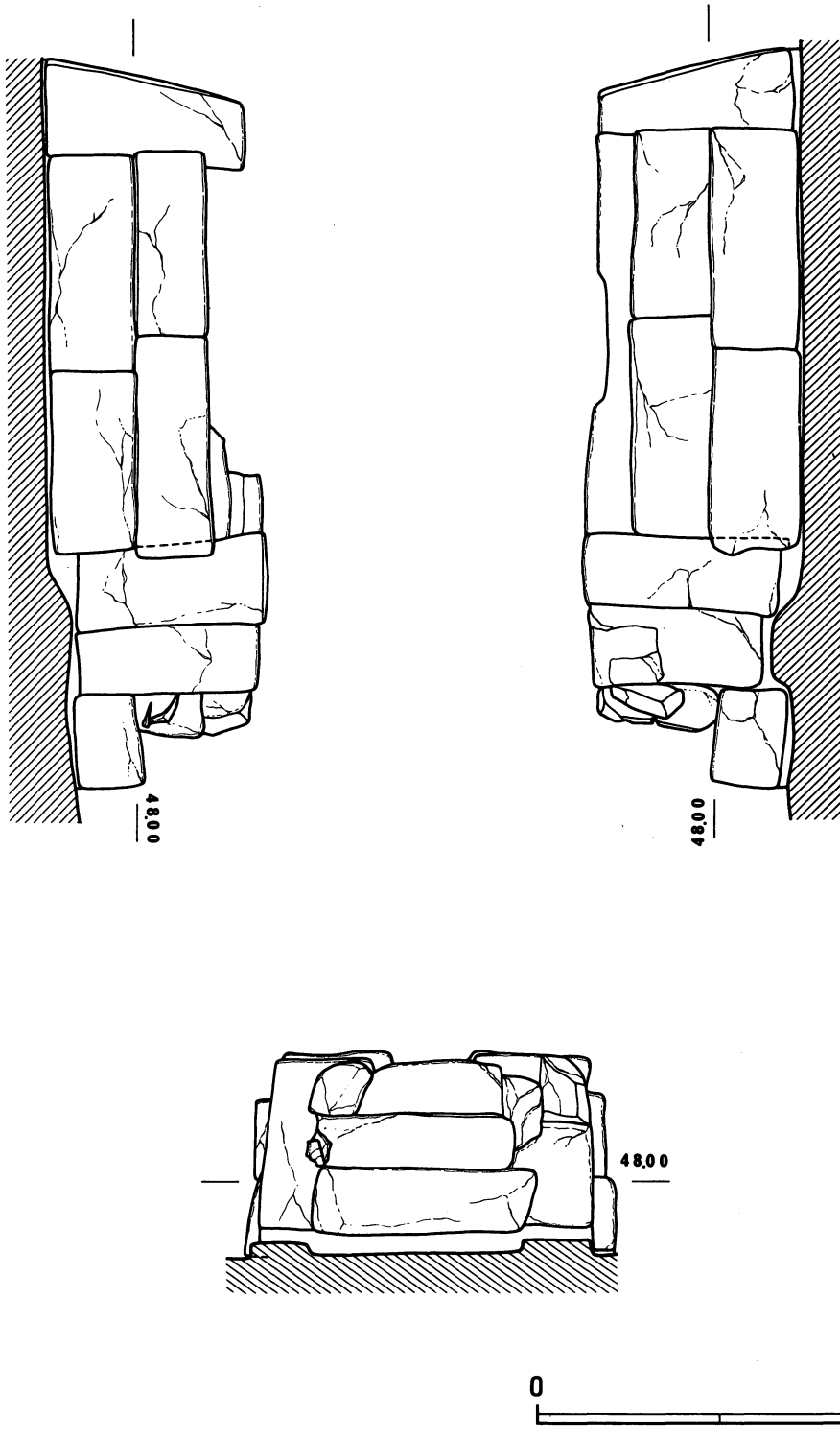
玄室は奥石から框石まで長さ2.2ｍ、奥石側で最大幅1.05ｍ、框石側で最少幅0.95ｍを測り、奥石側より框石側にややせばまる長方形を呈する。奥石は高さ1.1ｍ、基底部幅1.1ｍ、上面幅0.65ｍ、基底部厚さ0.5ｍ、上面厚さ0.35ｍを測り、やや石室内部に内傾する。なお、奥石背面には石材加工痕跡が認められた。



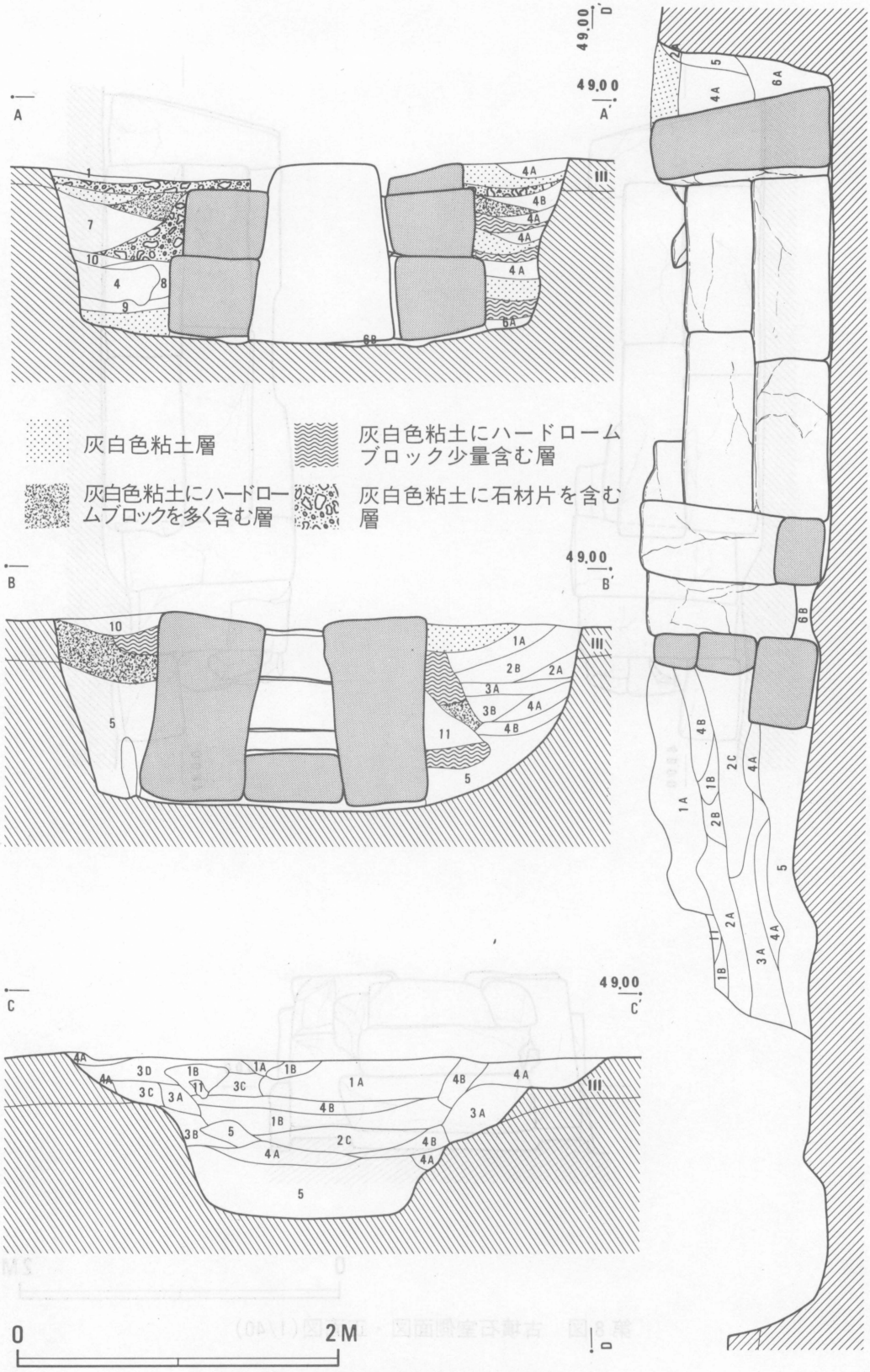
第6図　古墳石室展開図(1/40)



第７図　古墳石室平面図(1/40)



第 8 図　古墳石室側面図・正面図(1/40)



第９図　古墳石室裏込め土層断面図(1/40)

古墳（003）主体部土層説明

1 A．黄褐色土層　ハードロームブロックを含む。

1 B．黄褐色土層　1 Aより多量のハードロームブロックを含む。

2 A．暗褐色土層　ローム粒、ハードロームブロックを少量含む。

2 B．暗褐色土層　2 Aより多量のローム粒、ハードロームブロックを含む。

2 C．暗褐色土層　2 Bより更に多くのハードロームブロックを含む。

3 A．黒色土層　ローム粒を少量含む。

3 B．黒色土層　3 Aにややハードロームブロックを含む。

3 C．黒褐色土層

3 D．黒褐色土層　3 Aより多量のローム粒を含む。

4 A．黄色土層　ソフトローム、ハードロームブロックを多量に含む。

4 B．黄色土層　4 Aよりソフトローム、ハードロームブロックが少い。

5．　黄色土層　ハードロームブロック主体で少量のソフトローム、黒色土を含む。

6 A．明褐色土層　ソフトローム多く含む。

6 B．明褐色土層　6 Aよりしまりが強い。

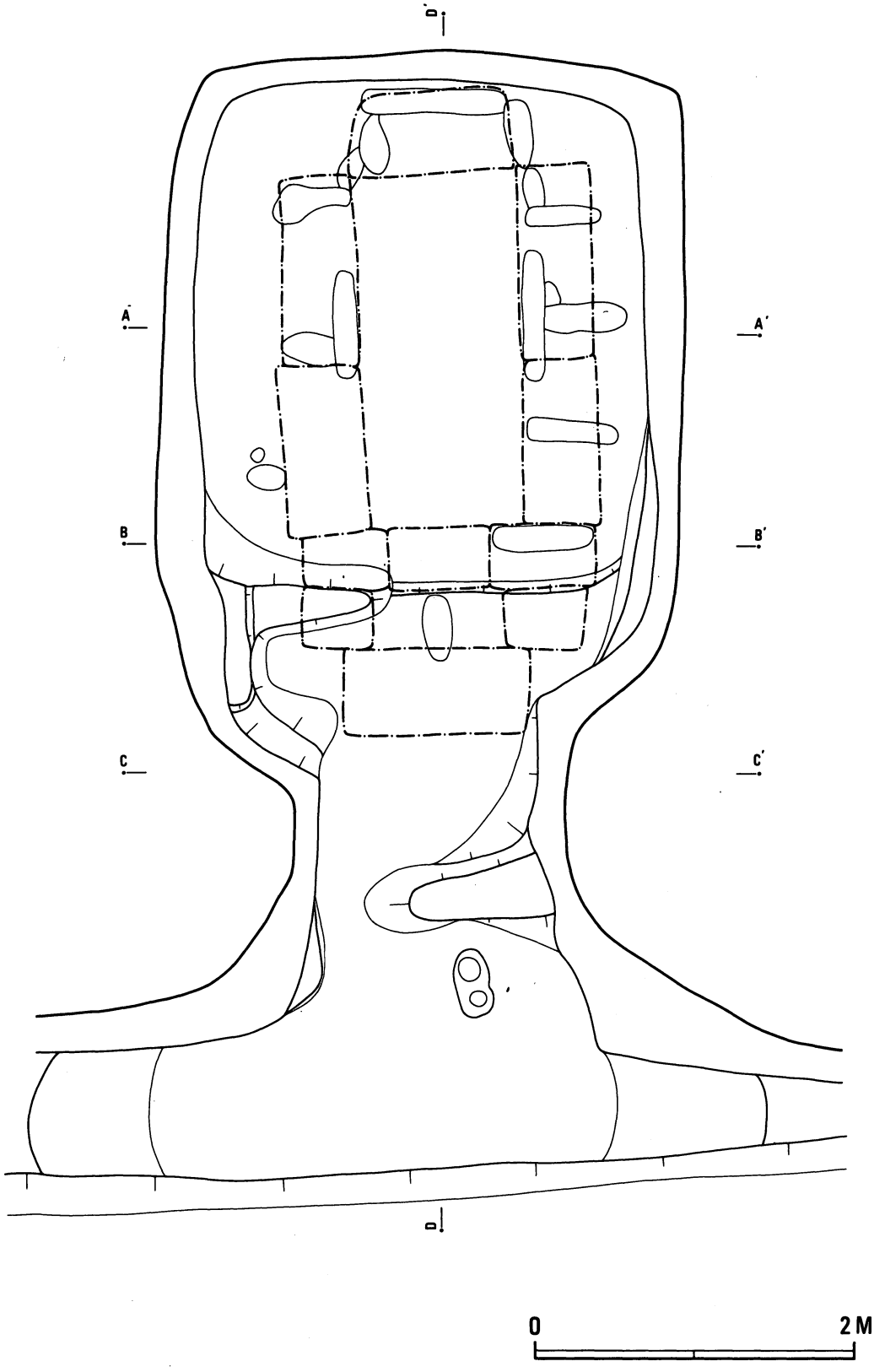
7．　暗褐色土層　灰白色粘土、ハードロームブロックを少量含む。

8．　黄褐色土層　石室の石材と同種の石の破片を含む。

9．　黄褐色土層　ローム粒多く、粘性がかなり強い。

10．　黒褐色土層　ローム少量含む。

11．　ハードロームブロック



第10図　古墳石室掘り方平面図(1/40)

左右の側石は、２段目まではほぼ同じ長方形の軟質砂岩を整形した部材を横に２個配置し、３段で構成されている。この軟質砂岩には明褐色のものと暗灰褐色の色調をもつものとがあった。２段目側石上には、厚さ25cm、幅50cmを測る３段目右側石が遺存していた。しかし３段目左側石は攪乱のためにそのほとんどが確認されなかった。この３段目側石は基本的に２枚ずつ配置されたと思われるが、その接合箇所は確認できなかつた。

玄室袖石は側石と同種の部材を框石に密着させて方柱状に配している。また、袖石と側石との接合部分は、側石の長さが一定していないために、右側石１段目及び左側石２段目部分で整形が認められた。（第８図石室側面図では、この整形を点線で示した。）側石の大きさは、１段目框石側及び２段目奥石側の各々２枚が、長さ１ｍ、幅0.5ｍ、厚さ0.5ｍ、１段目奥石側、２段目框石側の各々２枚が、長さ1.2ｍ、幅0.5ｍ、厚さ0.5ｍを測る。これらは石室内部へ内傾する様に整形され、更に２段目は内部へ10cm程持ち送られている。框石は長さ0.6ｍ、幅0.4ｍ、厚さ0.4ｍ、玄室袖石は長さ1.1ｍ、幅0.6ｍ、厚さ0.45ｍを測る。玄室袖石は框石側に内傾する様に整形されている。

羨道部分は羨道部側石と袖石が分離せず、そのすぐ背後に閉塞石が配置されている。羨道部の側石（袖石、以下側石とする。）は基底面がここより高くなるため、玄室袖石と比較してその長さが短かくなっている。羨道部側石は、長さ0.9ｍ、幅0.55ｍ、厚さ0.4ｍを計る。部材は玄室側石と同種の軟質砂岩であり、それを縦に配置している。

閉塞石は１段目に玄室側石と同種、同規模の部材を横に配置し、この上にうすい長方形の部材を羨道部側石にもたせかけるようにして配置している。なお、３段目の部材は２段目の部材より更に小さく、左右に小さな石をそえて閉塞をおえている。おそらく閉塞石を下から１段ずつ配置しながら裏込めを行ったと推定される。

石室内部は天井石と思われる部材の断片を中心として、暗褐色土を主体とした土砂が充満し、これに灰白色粘土ブロック、ロームブロック等が基底面から確認面に至るまで混入していた。石室内はすでに盗掘にあったと思われ、内部から副葬品等の遺物はほとんど出土しなかった。

出土した遺物（第11図１～６）

１．須恵器（長頸壺）

主体部出土。体部のみの破片である。ロクロ成形。体部下半はヘラケズリ。体部上半部に一部自然釉が認められる。色調は灰白色。

２．須恵器（坏）

周溝内出土。破片が小さく口径は不明である。ロクロ成形。口縁部ヨコナデ調整。色調は灰白色で、胎土は砂粒少くやや緻密である。

3．須恵器（坏）

周溝内出土。高台部の径12.4cm。破片が小さくかなり磨滅している。ロクロ成形。色調は灰白色で、胎土は砂粒少くやや緻密である。

4．土師器（壺）

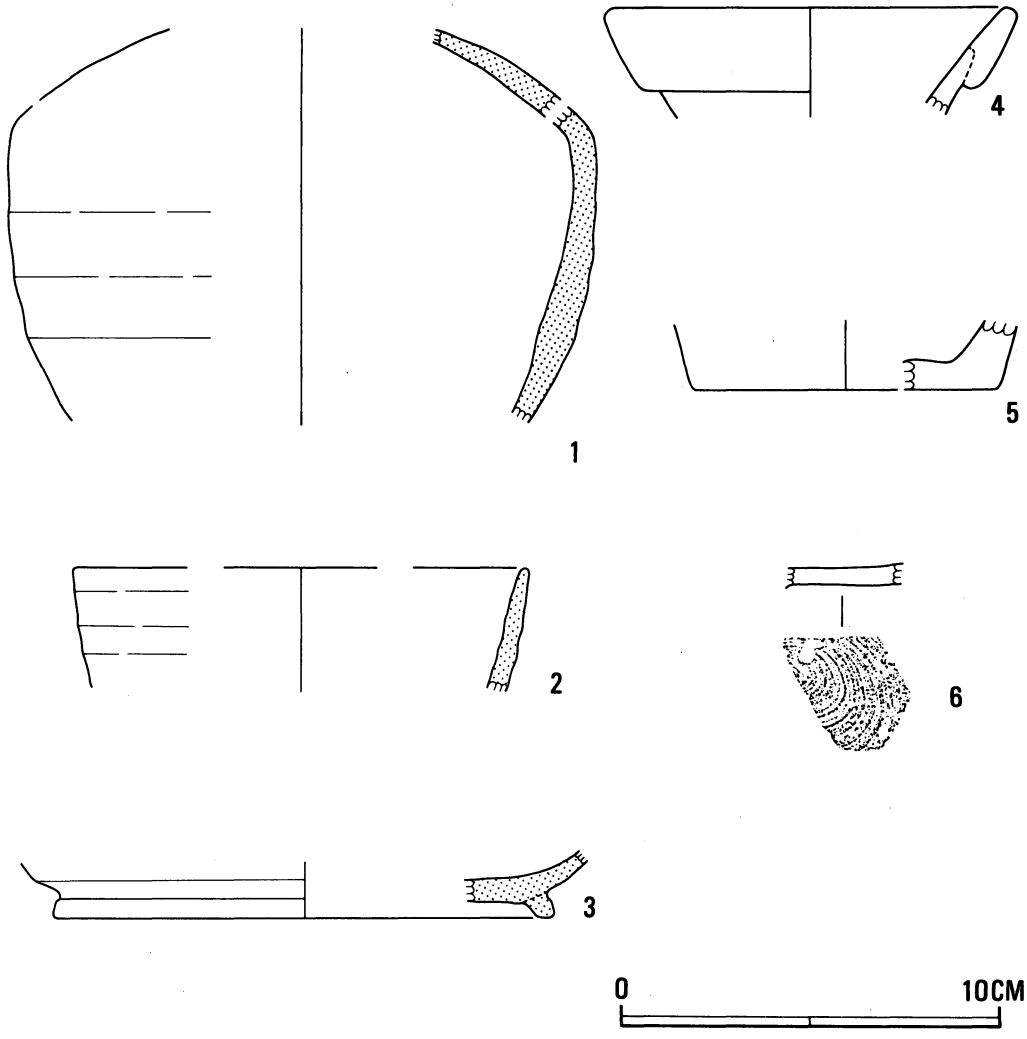
周溝内出土。口縁部1/4のみの破片である。復元口径は11cm。色調は茶褐色で、胎土は砂粒、スコリアを多く含み粗い。口縁部内外面ともヨコナデである。

5．土師器（甕）

周溝内出土。底部約1/3の破片である。底径8cm。色調は暗褐色で、胎土にはスコリアを多く含む。外面はヘラケズリ後一部ヘラミガキ、底部外面はヘラケズリ、内面ナデである。

6．土師器（坏）

周溝内出土。破片が小さく底径は不明。底部には鮮明に回転糸切りの跡が認められる。



第11図　古墳出土遺物実測図(1/2)

3．方形周溝状遺構

002号址

遺跡西端中央部に位置する。一辺が約９ｍの正方形を呈し、周溝は全周する。周溝内側の平坦部は一辺約７ｍ、周溝幅約１ｍを測る。周溝は西側周溝がやや凹凸が激しく、断面も不整の鍋底状を呈し、深さ40cmを測る。他の３辺の周溝は比較的掘り込みもきちんとしており、北側溝で深さ60cm、南側溝50cm、東側溝60cmを測り、逆台形を呈する。特に東側溝では基底面上約15cm程にハードロームブロック主体のよくしまった黄褐色土層が、あたかもうめもどされた状態で充塡されていた。この東側の溝が他の周溝と比較して一番しっかりとした掘り込み状況を呈している。

これら各辺の周溝の掘り込み状況がそれぞれ若干異なることは、それぞれの周溝がある特性を有するためか、あるいは各周溝の掘削を担当する人間が各々異なったためと考えられる。

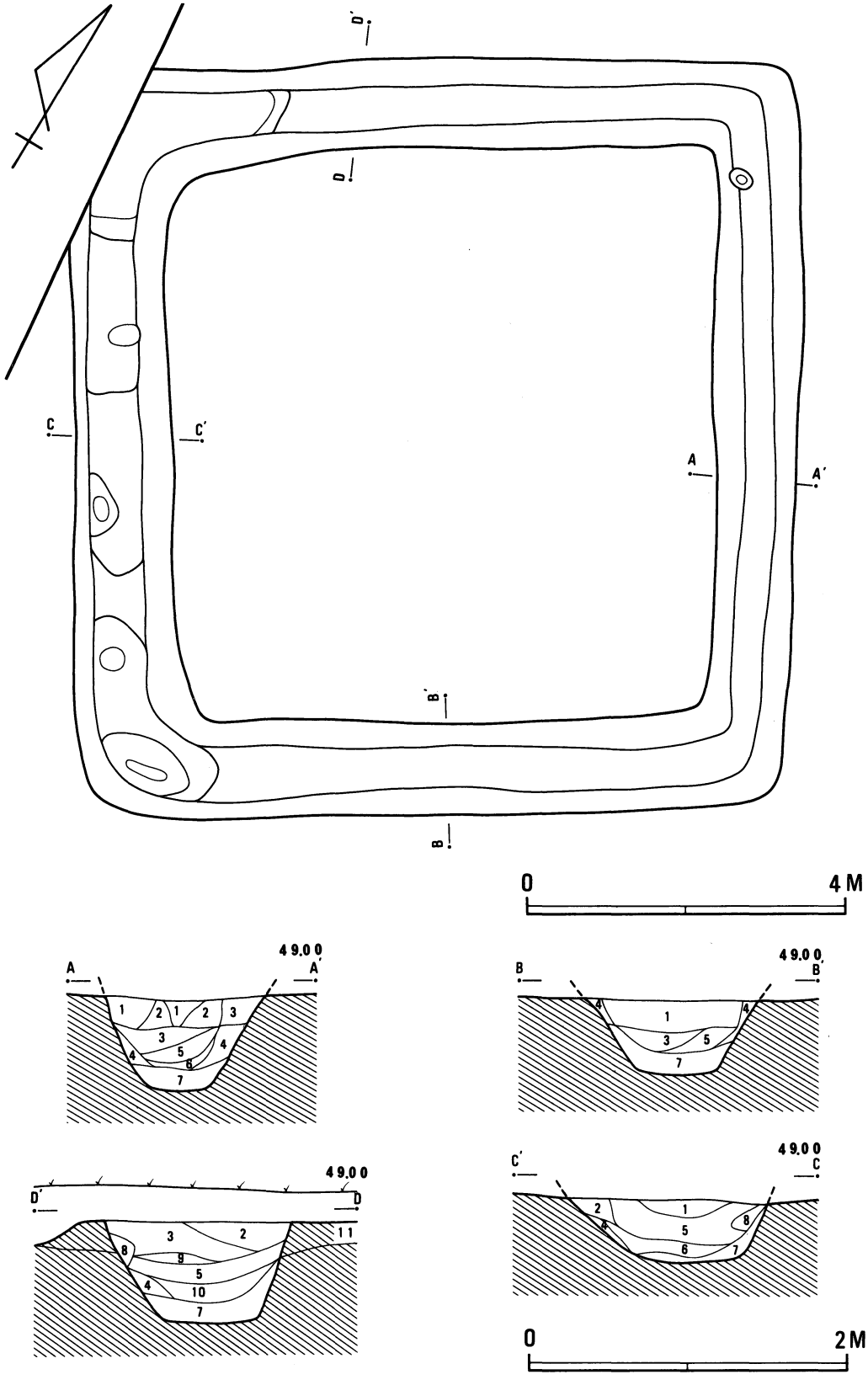
中央平坦部には主体部と思われる土壙は確認されなかった。

周溝内からは当遺構に伴う遺物の出土はみられず、若干の縄文式土器片が出土しているのみである。

なお、第４図６の石鏃は当遺構の南約５ｍ程のソフトローム直上より出土したものである。

周溝土層説明

1．　黒色土層　　ローム粒少量含み、しまりが強い。
2．　黒色土層　　ローム粒少量含む。
3．　暗褐色土層　２よりローム粒多く、粘性が強い。
4．　黄褐色土層　ローム粒多量に含む。
5．　暗褐色土層　ローム粒、焼土粒やや多く含む。
6．　黄褐色土層　ハードロームブロック少量含む。
7．　黄褐色土層　ハードロームブロック主体。
8．　ハードロームブロック
9．　暗褐色土層
10．　明褐色土層



第12図　方形周溝状遺構(002)実測図(1/40, 1/80)

003号址

溝（005）をはさみ北側に古墳（001）南側に当方形周溝状遺構が位置する。一辺約９ｍで南側と東側の溝中央に張り出しを有し不整方形を呈する。遺構確認面がソフトローム層上面であったため、遺存状況は悪く溝の深さは40～50cm程である。西側周溝の一部にはソフトロームに黄褐色土の落ち込みが認められた。周溝が深く掘り込まれていないため、この様な状態を呈したものと思われる。002方形周溝状遺構と比較すると全体に溝の掘り方は、平面的にゆがみ、やや外側にふくらんでいる。溝の断面は一部で逆台形を呈するが、全体に浅いすり鉢状である。

東側と南側の張り出し部分は周溝状遺構に属するものと判断された。どちらの張り出し部分にも中央に10～20cm程の浅い掘り込みがみられた。遺物は検出されなかった。

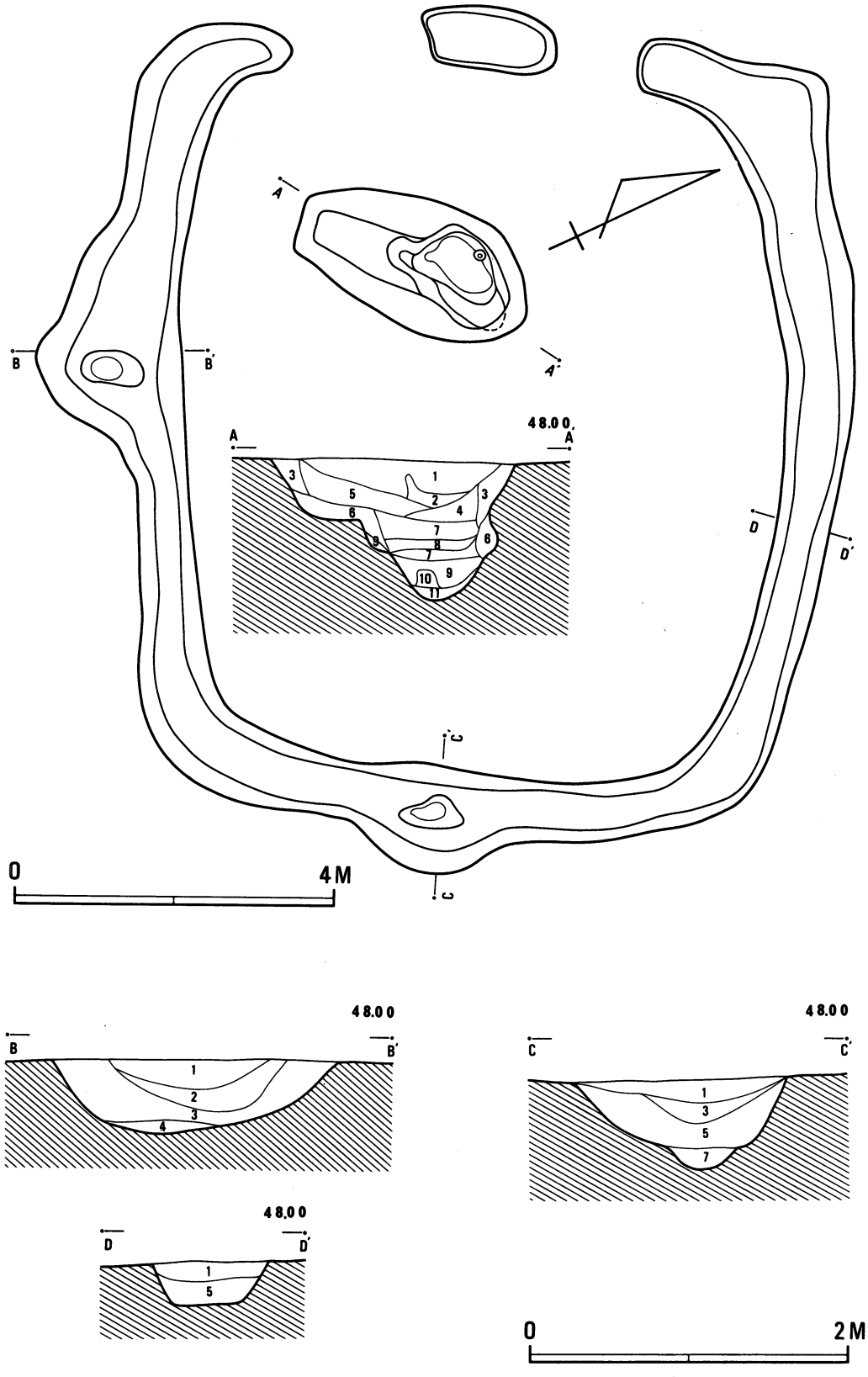
西側周溝近くに確認された土壙は、その形態、深さ、内部の状況から主体部とは異なる性格のものと判断される。また、当周溝状遺構に伴うものかどうかも不明である。この土壙は長軸３ｍ、短軸1.5ｍの楕円形を呈する。東側には深さ70cm程度の平坦面があり、掘削時の足掛けと思われるステップを有する。西側壁はほぼ垂直で、確認面からの深さ1.7ｍを測り、内壁はかなり乱雑に掘られている。内部より遺物は検出されなかった。

周溝土層説明

1．黒褐色土層　　2．黒褐色土層　　ローム粒少量含む。
3．黄褐色土層　　4．黄褐色土層　　ハードロームブロックを含む。
5．黒褐色土層　　ローム粒、ハードロームブロックを含む。
6．黄褐色土層　　ローム粒を多量に含む。
7．黄褐色土層　　ソフトローム粒を多量に含む。

土壙土層説明

1．黒褐色土層　　2．黒褐色土層　　ローム粒を含む。
3．明褐色土層　　4．黒褐色土層　　ローム粒を多量に含む。
5．黒色土層　　6．褐色土層　　7．ロームブロック
8．黒色土層　　しまりが強い。　　9．黒褐色土層　ハードロームブロックを少量含む。
10．黄色土層　　ハードロームブロック主体でよくしまっている。
11．黄色土層　　ハードロームブロック主体。
12．黒褐色土層　ハードロームブロックを含む。



第13図　方形周溝状遺構(003)実測図(1/40, 1/80)

4．土壙・溝・ピット列

土壙（007）

方形周溝状遺構（003 ）の南約30m程に確認された土壙である。上端長軸 2.5m 、短軸 2 m 深さ1.8 mを測り、楕円形を呈する。東側壁はややゆるやかな傾斜をもち、西側壁はほぼ垂直におちる。基底面は径 2 mを測り、基底面近くの壁は15～20cm程外側にふくらみをもつフラスコ状を呈する。基底面は深いところで武蔵野ローム層上面まで及んでいる。また、基底面中央部は、周囲より数cm程高くなっている。埋土は上層に黒褐色土層を中心として自然堆積を呈しているが、下層は主としてハードロームブロックを主体とした黄褐色土層であった。

遺構内より遺物は検出されなかった。

溝（004）

南側発掘区内より確認された、北西－南西に走る幅1.5m～2mの溝である。遺構確認面は暗褐色土層であったが、遺構全体が耕作等による攪乱が激しいために、一部を除いてソフトローム層上面で遺構精査を実施した。

遺構を発掘したところ、溝中央部分に厚さ10cm程度のローム粒を多量に含み、よく踏み固められた状態の黄褐色土層が検出された。（第15図平面図スクリントーン部分）この硬化面層はかなりの範囲に及びところどころ数層にわたって検出された。プランとしては北側で一部幅が 2 mに及び、全体として南西側にゆるやかな傾斜を有する。上端幅約1.5m、基底部幅50～60cmを測り平坦である。

遺構内より遺物は検出されなかった。

溝（004）土層説明

1．黒色土層　　2．黄褐色土層　　ローム粒多量に含み、しまりが強い。

3．暗褐色土層　　ローム粒少量含む。

4 A．暗褐色土層　　3よりローム粒多く含み、しまりが強い。

4 B．暗褐色土層　　4 Aより更にローム粒多く含み、しまりが強い。

5 A．明褐色土層　　4 Bよりローム粒多く含み、しまりが強い。

5 B．明褐色土層　　5 Aよりローム粒多く含み、しまりが強い。

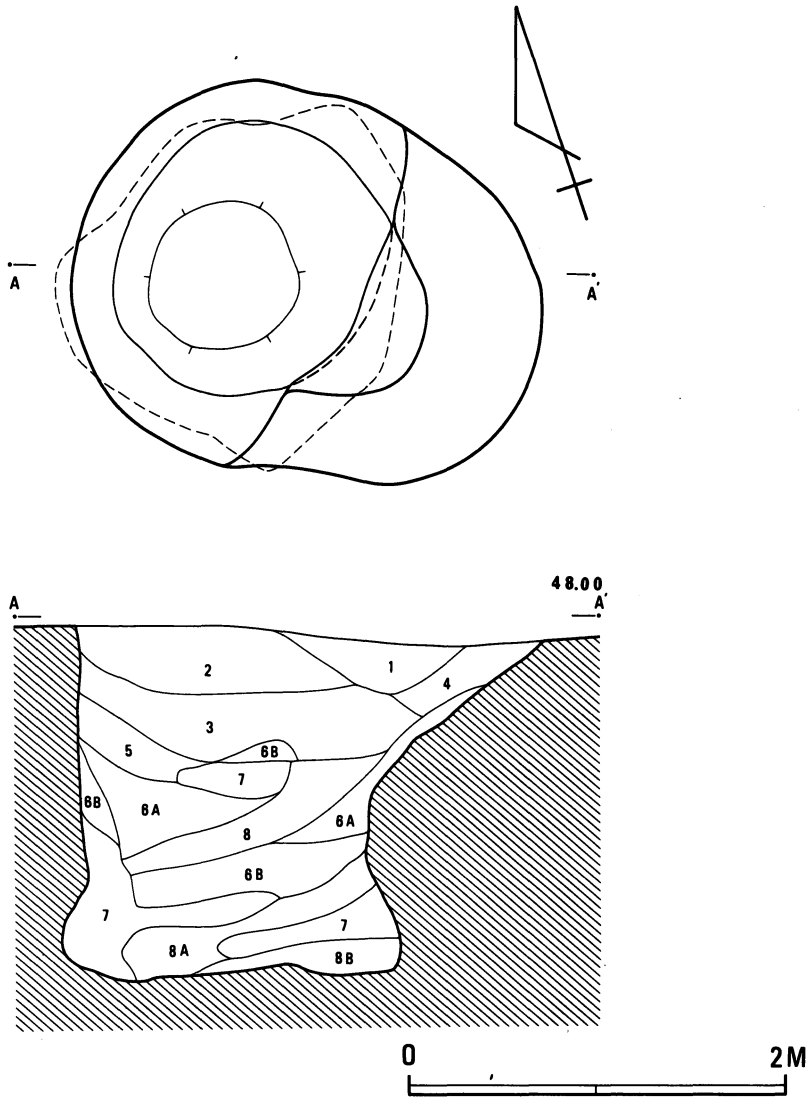
6．黒褐色土層　　7．黒褐色土層　　ハードロームブロックを少量含む。

8．ハードロームブロック　　9．黒色土層　　しまりがやや強い。

10A．黒色土層　　ローム粒を少量含む。

10B．黒色土層　　10Aよりローム粒を多く含む。

11．黄褐色土層



第14図　土壙(007)実測図(1/40)

土壙（007）土層説明

1．暗褐色土層　　2．黒色土層　　3．黒色土層　　2に少量のローム粒を含む。

4．黒褐色土層　　3より更に多くのローム粒を含む。

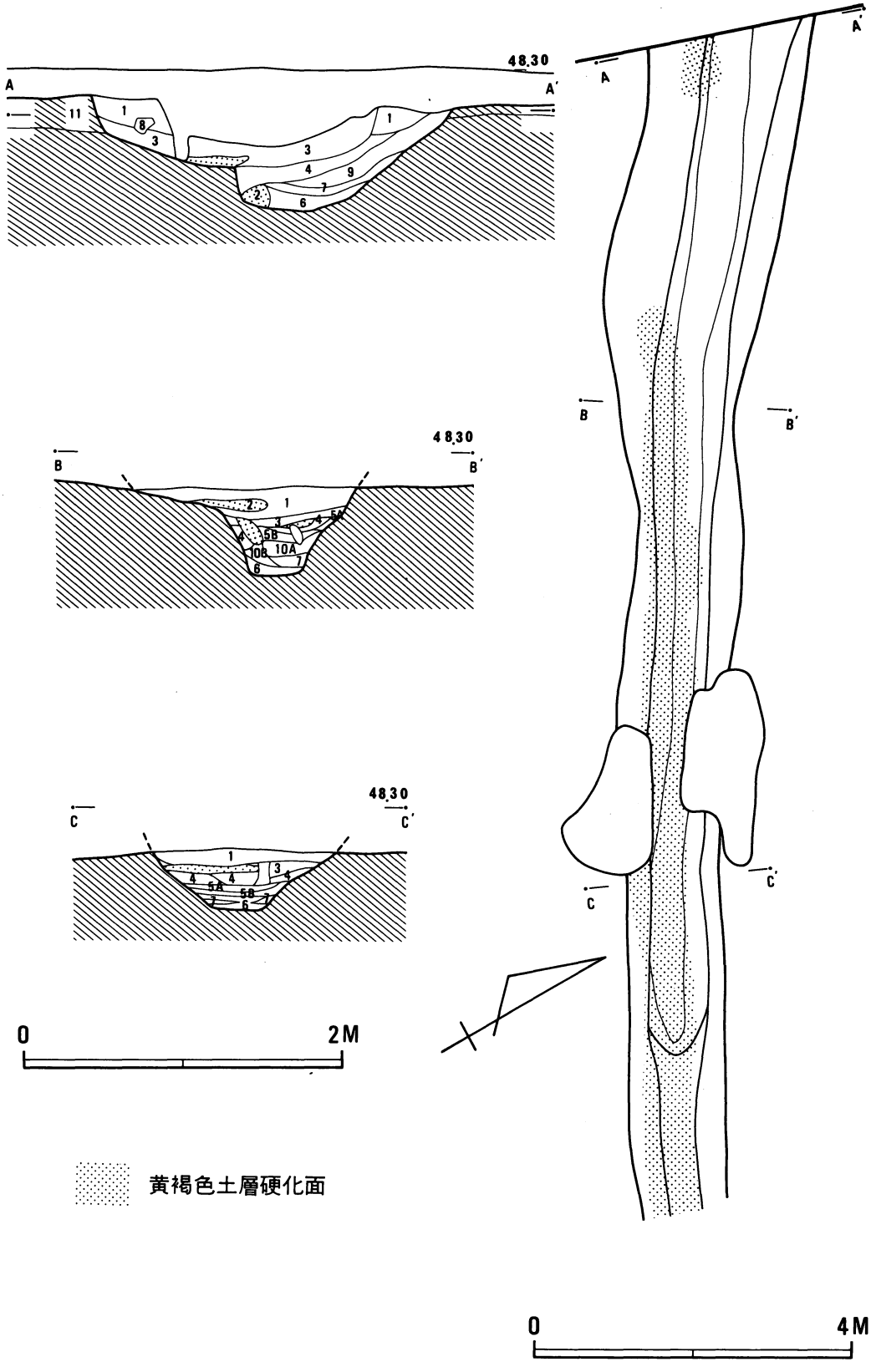
5．黒褐色土層　　少量のハードロームブロックを含む。

6A．黄褐色土層　　6B．黄褐色土　　6Aにハードロームブロックを多く含む。

7．黄色土層　　ハードロームブロック主体。

8A．暗褐色土層　　ローム粒少量含む。

8B．暗褐色土層　　8Aよりローム粒多く含む。



第15図　溝(004)実測図(1/40, 1/80)

溝（005）

古墳（001 ）の西側に位置し、北西－南東へと約45m延びる溝である。幅１ｍ、深さ40cmを計る。北西よりの一辺2.5 ｍの方形ピットを切って掘られている。埋土は黒褐色土を主体としており、縄文土器片が数点出土している。

溝（005）土層説明

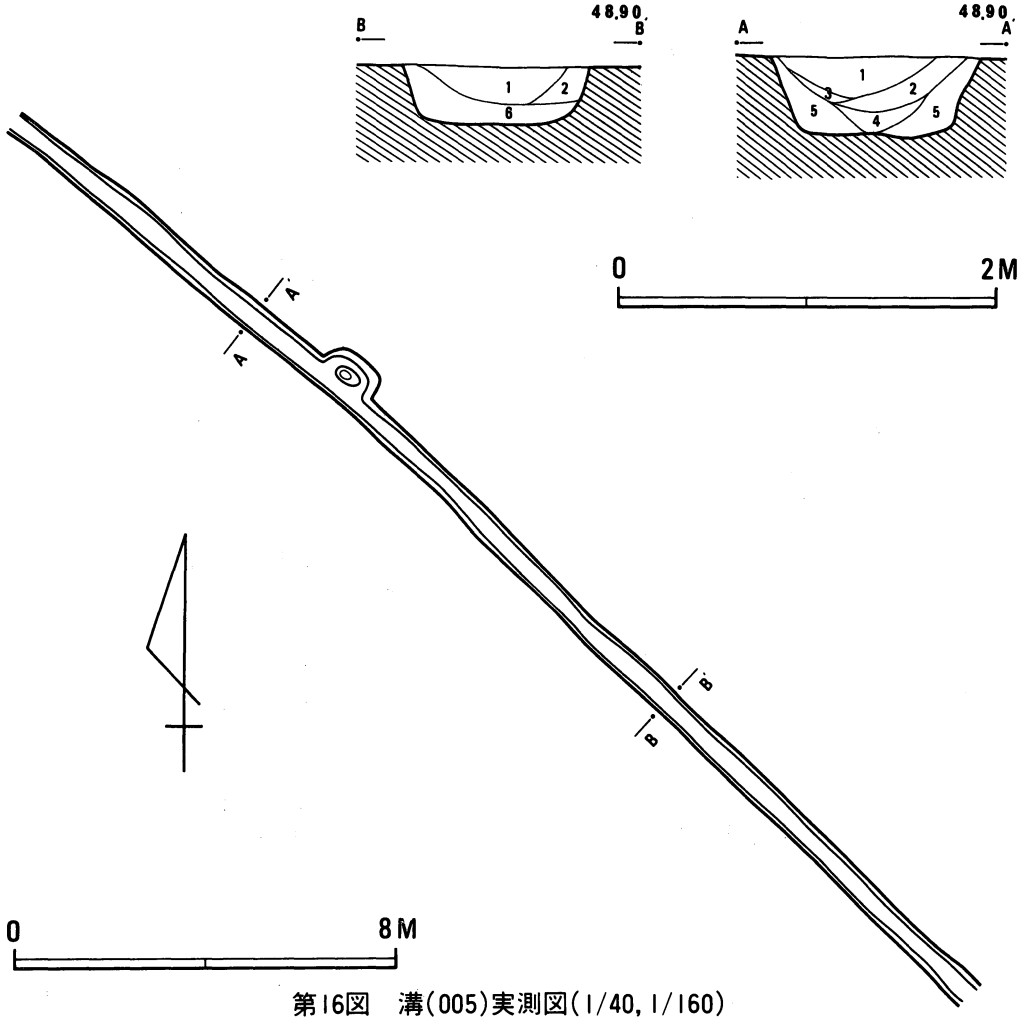
１．黒褐色土層　　２．黒色土層

３．黒褐色土層　　ローム粒少量を含む。

４．黒褐色土層　　１よりやや黒色味強い。

５．暗褐色土層　　ローム粒少量を含む。

６．暗褐色土層　　５よりややローム粒を多く含む。

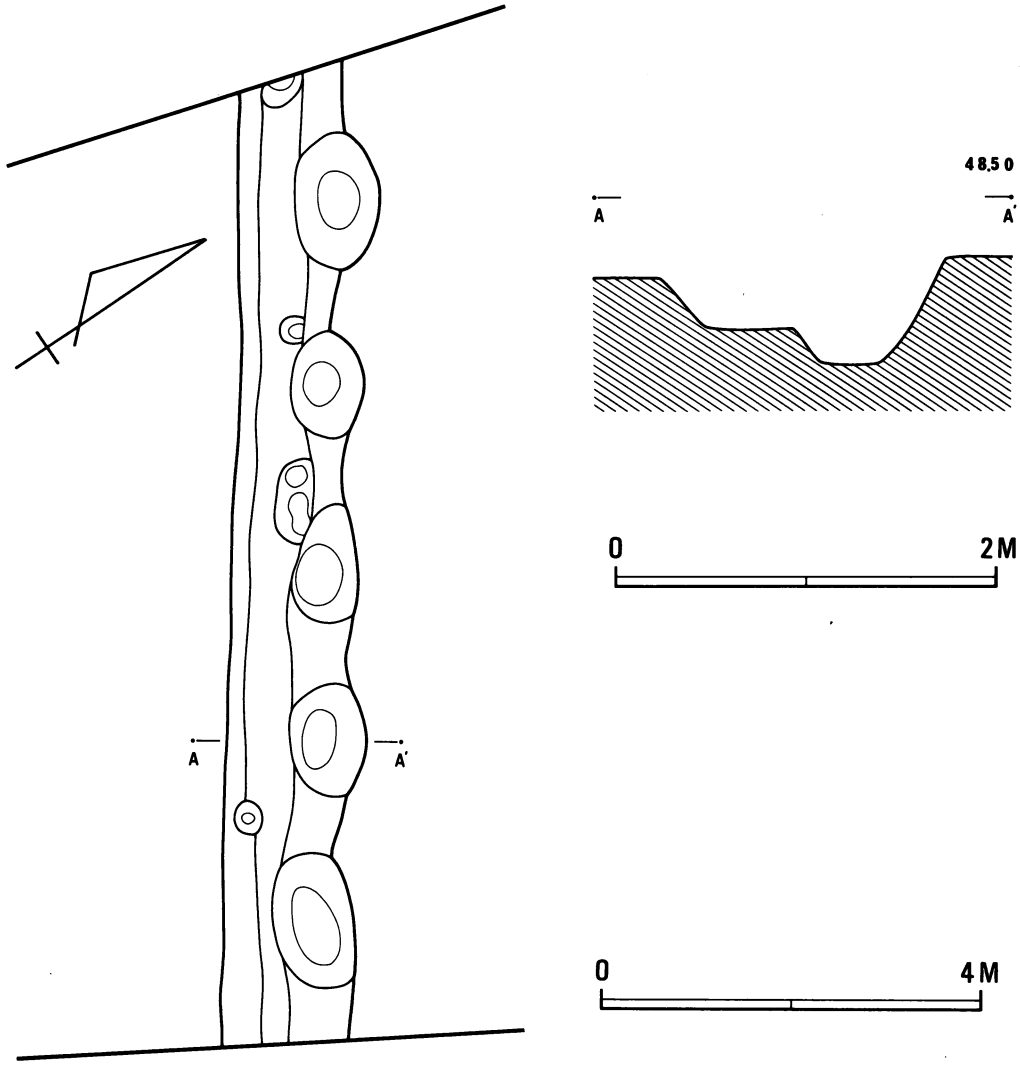


第16図　溝(005)実測図(1/40, 1/160)

溝（006）

遺跡の南西端で確認された北西－南東に走る溝である。溝北側には５つのピットが整然と内部に並んでいる。このピットは溝と同時期のものであり、埋土はいずれも黒褐色土であった。ピットの径は長軸1.4m、短軸１～1.2m程度の楕円形を呈し、深さは50cmで、溝の基底面より20cm程深い。このピットは掘り方、埋土等をみるとピット列（008 ）のそれと類似している。溝の幅は50～60cm、深さ30cmを測り、基底面はほぼ平坦である。

遺構内より遺物は検出されなかった。



第17図　溝(006)実測図(1/40, 1/80)

ピット列（008）

土壙（007 ）の南に位置し、北東－南西に連なる16個のピットよりなる遺構である。それぞれのピットは径１ｍ、深さ40cm程を測る。埋土は黒褐色土層であり、比較的新しい時期のものと考えられる。

遺構内より遺物は検出されなかった。

III. 小　結

当遺跡全体は前述したとおり、村田川下流域からやや離れた洪積台地上に位置し、周辺には古墳時代を中心とした集落、古墳群等が密集している。現在こうした集落と墓域の発掘調査を通して、この地域の古墳時代文化のあり方も除々に解明されつつある。

当遺跡からは古墳、方形周溝状遺構、土壙、溝、ピット列が検出された。

古墳は横穴式石室をもつ一辺18mの方墳であり、古墳時代後期のものと考えられる。また、方形周溝状遺構は古墳時代以降に形成された墓制に関わるものと思われる。その他土壙・溝・ピット列が検出されたが、性格は明らかでない。

当遺跡で発掘された遺構に関しては、方墳と方形周溝状遺構に若干の特徴がみられる。以下調査成果に基づきその問題点をあげてみたい。

方墳について

墳丘部分は近年の造成等により、その本来の形状は不明であるが、周溝の形態及び主体部掘り方基底面に特徴がみられる。

遺構全体は東側部分が調査対象区外であったため、主体部を含む西側半分だけしか調査できない状況であった。しかし周辺の古墳の形態と比較して考えると、一辺約18mの正方形の周溝をもつ古墳時代後期の方墳と判断される。周溝部分は既に述べたとおり、2段掘りで墳丘側にテラス状の段を有するものである。周溝内から遺物は検出されなかった。この村田川流域の古墳にはこの様な形状をもつ周溝は他に例がみられず、いかなる目的をもってこのテラスが構築されたのかは即断できない。周辺の古墳群等で発掘された古墳の中には、その封土形成のために墳丘外周辺部、墳丘周溝側地山がそれぞれ削平されたものがみられる。椎名崎1号墳（前方後円墳）の調査では、こうした墳丘外周辺部、墳丘内側地山削平の土砂（褐色・暗褐色土）、周溝掘削時の土砂(ハードローム主体)等が、どのように封土構築に用いられたかが推定されている。こうした例からもわかるように、古墳築造の際には封土、石室等の形成に対してかなりの計画性があったことと推定される。

主体部は南側周溝中央に開口する横穴式石室であるが、主体部掘り方基底面にいくつかの浅いピットがみられる。これらのピットは奥石、玄室袖石の位置とほぼ一致し、あたかも掘り方掘削時にそれらの設置位置を定めたように思われる。また、玄室袖石設置部分に10～15cm程の段を有する。これらは石室を構成する各部材の設置位置をより計画的に決定したことを示しているといえる。

当方墳のこうした特徴は、古墳築造過程における全体的な計画性を暗示しているのではないだろうか。

方形周溝状遺構について

近年関東周辺では、方形に周溝がめぐる所謂方形周溝状遺構がしばしば確認されている。これらは方形周溝墓の墓制のみが形式的に遺存した地方的墓制であるとも言われ（註１）、時期的には奈良時代末から平安時代の所産とされている。当遺跡においても同様の遺構が２基検出された。002方形周溝状遺構は、周溝の断面は逆台形を示し、方形に区画された溝以外に付属する遺構は確認されていない。003方形周溝状遺構には、東側と南側の溝中央に張り出しをもち、全体にややゆがんでいる。この張り出し内からは遺物は確認されていない。西側溝付近の土壙は、生谷遺跡第３号周溝（註２）の土壙と比較すると形状がやや不定であるが、これと同性格の可能性も考えられる。当遺跡ではこれらの遺構から遺物は確認されず、その造営時期は不明であるが、その形態、規模等から判断して古墳時代以降の方形周溝状遺構と推定される。

今回の発掘調査より出土した遺物は、すでに述べたように先土器時代の石器、縄文式土器（中期、後期）、石鏃、土師器、須恵器である。

先土器時代の石器は第Ⅲ層上面より一点のみ出土したものである。縄文式土器は散発的に出土したものであり、特記すべき出土状況を示さなかった。須恵器は方墳主体部内より出土したものである。

註１．山岸良二氏の御教示による。

註２．「生谷」生谷遺跡発掘調査団　1977

SUMMARY

This report concerns archaeological investigations carried out at the Daizenno-Kita Site by the Cultural Properties Center of Chiba Prefecture.

Abministratively, the site is located at Ōkanezawa, Chiba City, Chiba Prefecture.

The site is situated on the dilluvial terrace about 50 meters above sea level . This terrace was penetrated by the small valleys formed by the Murata River flowing into Bay of Tokyo. Under these complex geographic setting of this area, ancient people made their villages and cemeteries. In recent archaeological investigations by our Tōnanbu Office, many villages, cemeteries and shell mounds were discovered, excavated and reported.

The confirmative investigations of this site were carried out in January and February, 1981 and basing on these results, the main investigations were carried out from April to June, 1981.

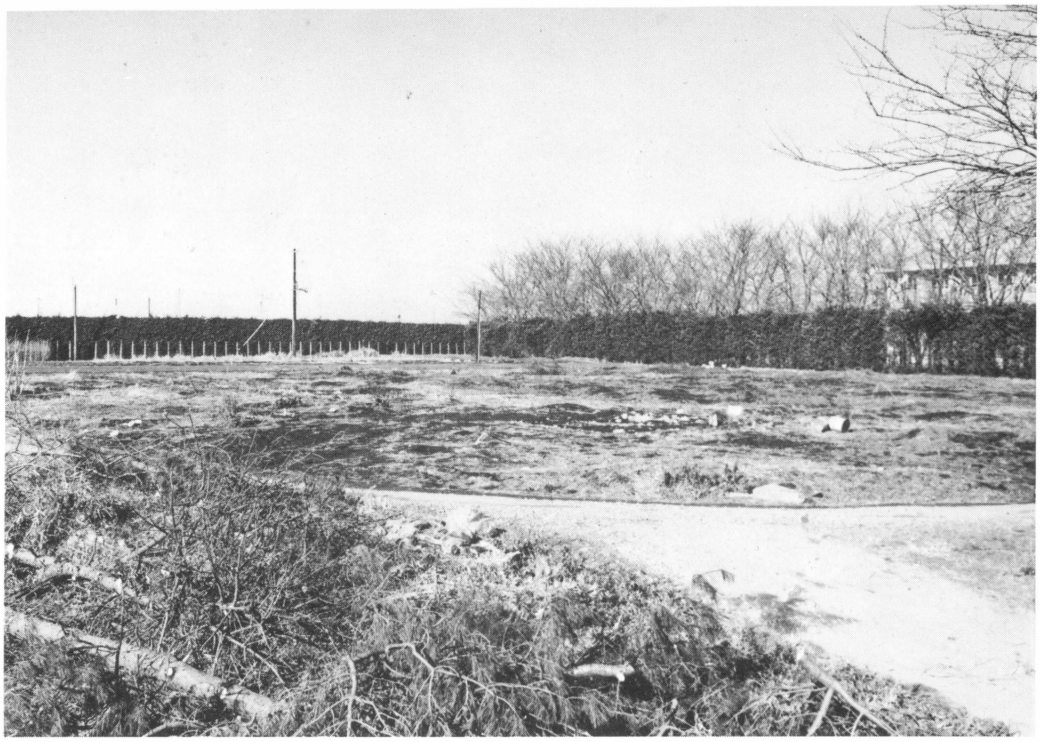
These investigations were rescue operations brought about by the construction of the job training school for the physically handicapped persons in Chiba Prefecture.

An area of 8,022 square meters was excavated. The following features were discovered, excavated and recorded before being destroyed; HŌFUN (a tumulus surrounded by quadrangular ditch of Late KOFUN period) two HŌKEISHŪKŌ (a quadrangular ditch supposed to be the tomb in Nara or Heian period), three ditches, one pit, one pit-line (dateless),

The HŌFUN had one burial chamber made of soft sandstones. But we found no human remains and a few grave goods (SUEKI type pottery) in the burial chamber.

The following artifact were also identified; stone implements (one graver, two arrowheads), a little Middle and Late Jomon pottery.

図　版

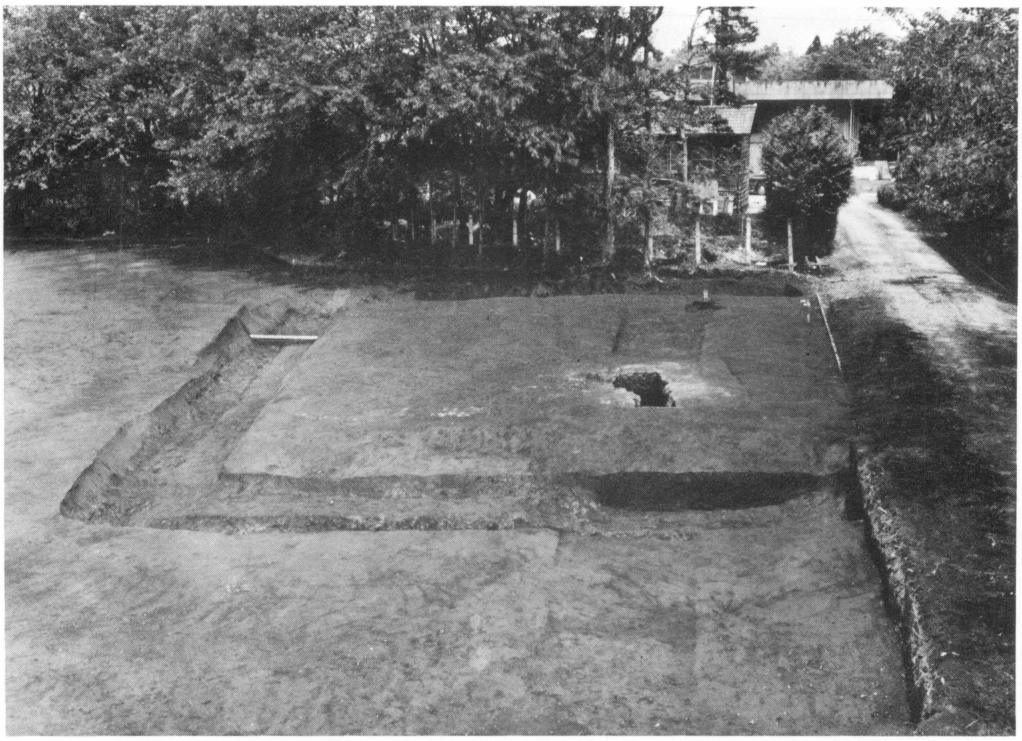


1．調査前近景(南東から)

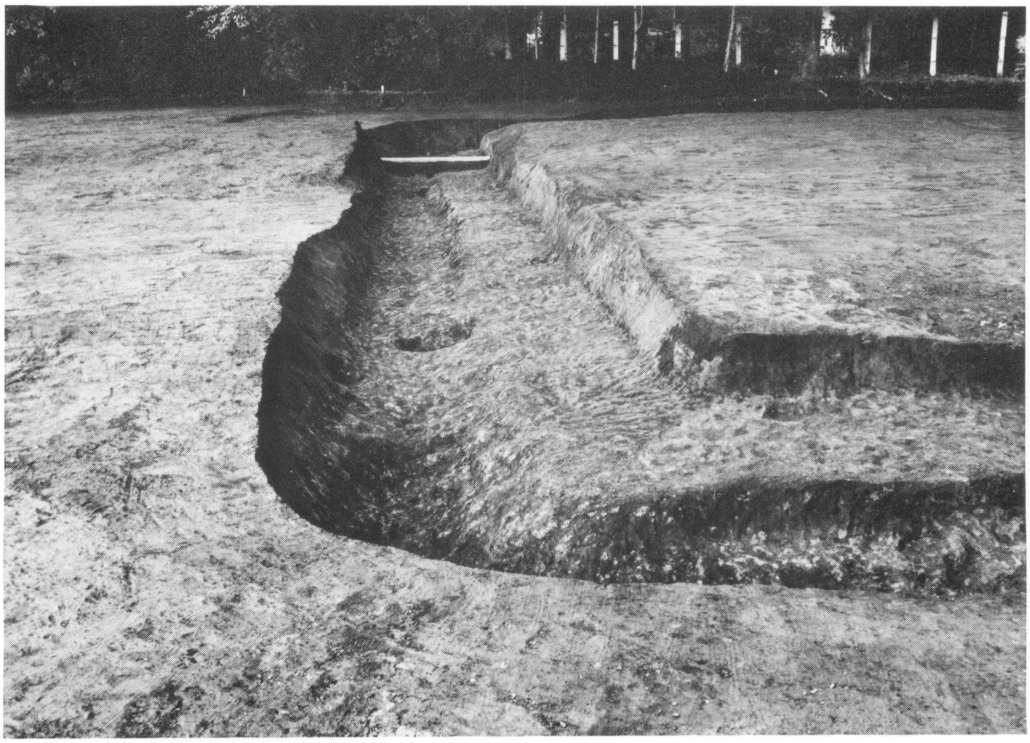
2．調査前遠景(南から)

古墳(001)

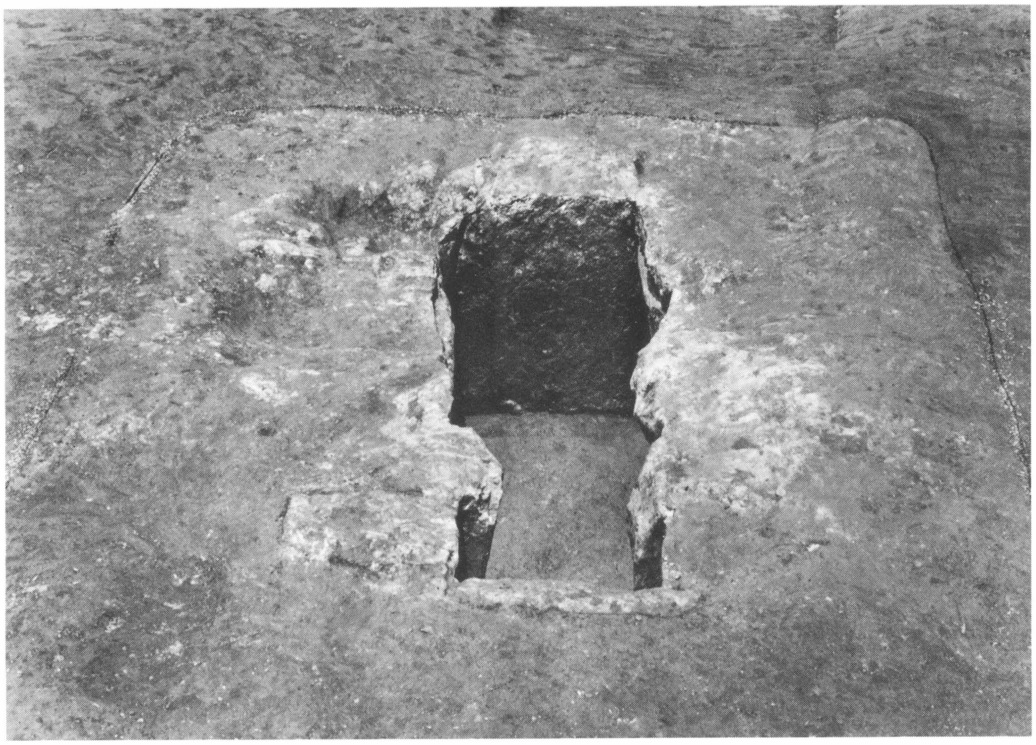
図版二



1．全景(石室埋土除去後)



2．周溝(西側)



1．石室

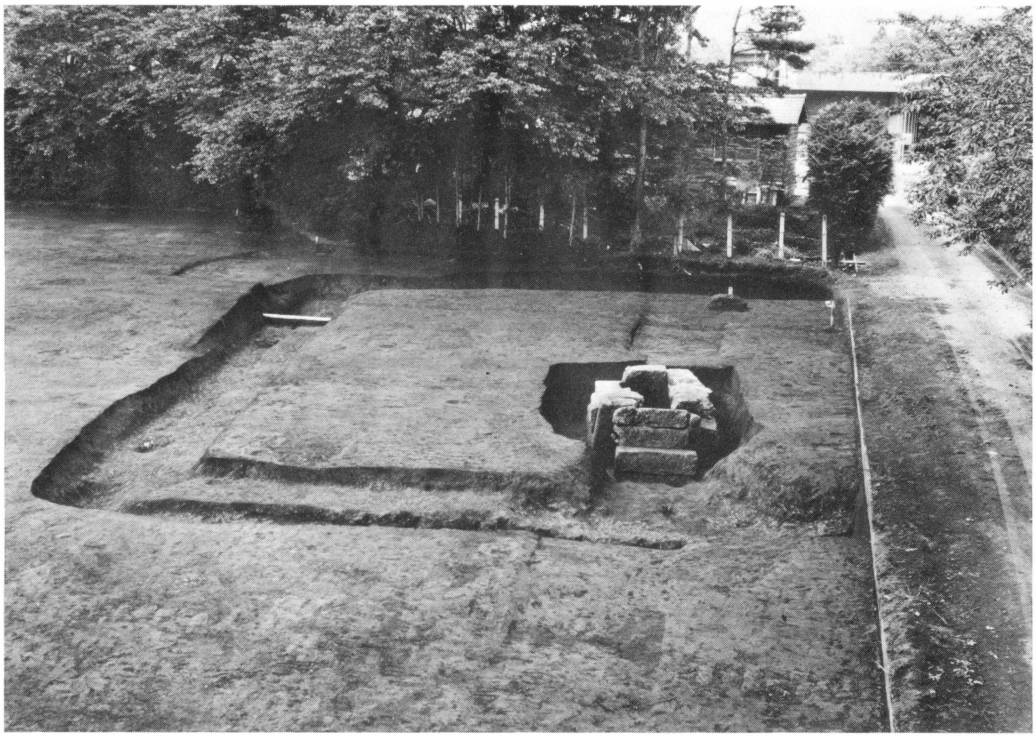
2．羨道裏込め状況

古墳(001)

図版四

1．袖石背後の裏込め状況

2．右側壁背後の裏込め状況

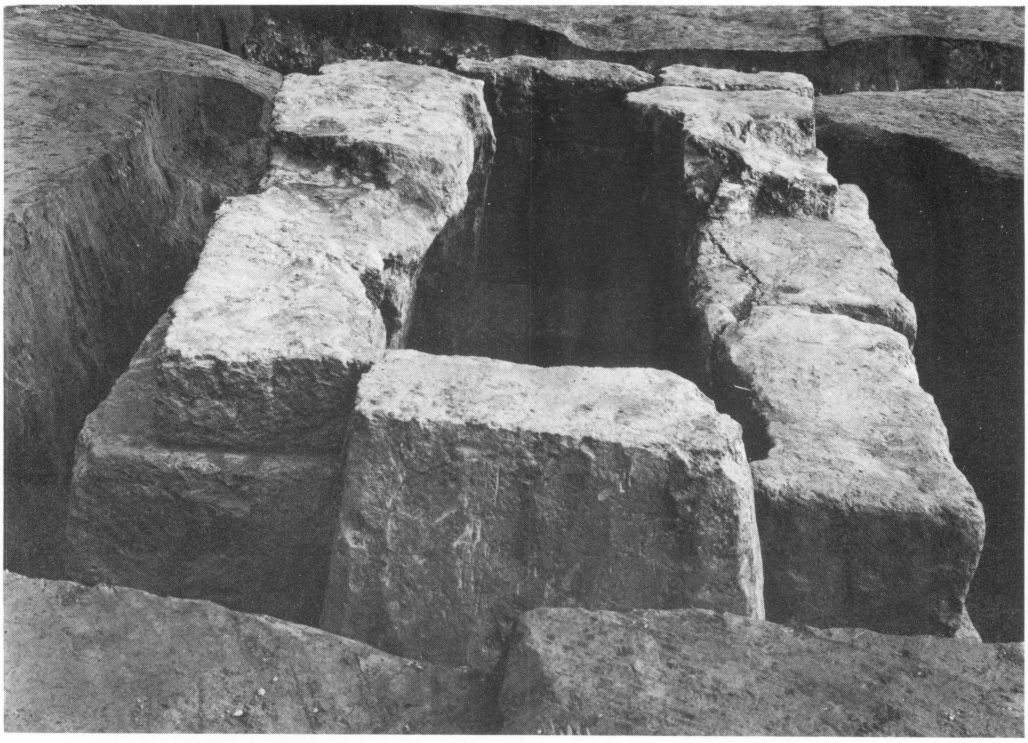


1．全景(石室検出後)

2．石室全景

古墳(001)

図版六



1．石室全景(奥壁から)

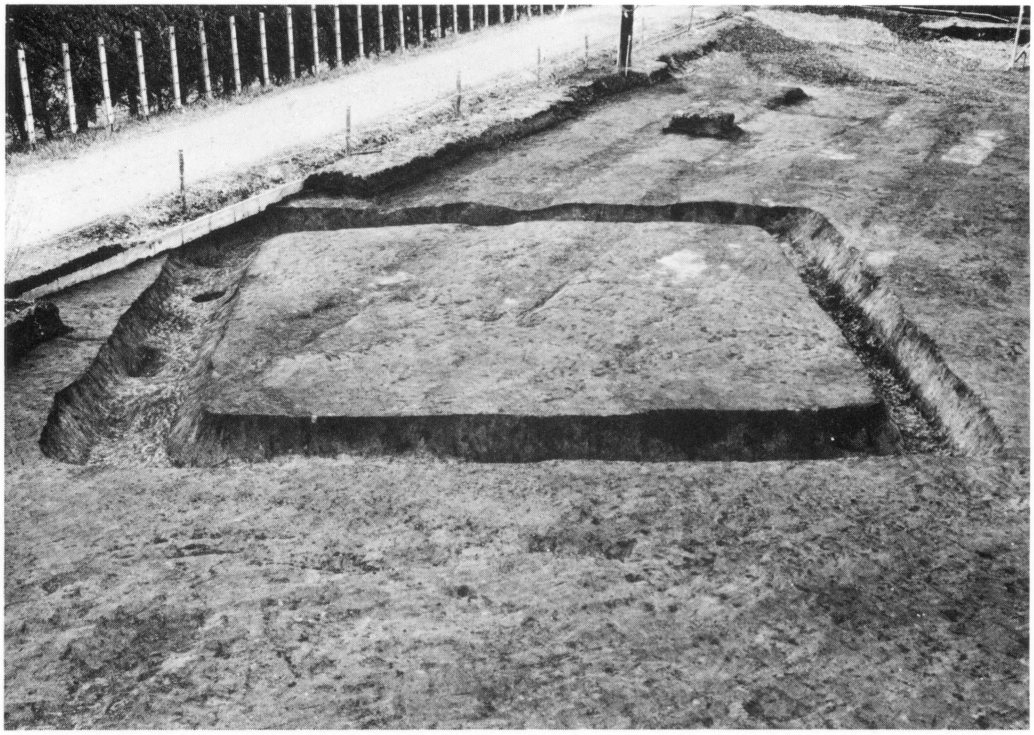
2．左側壁と袖石の接合状況

1．石室掘り方全景

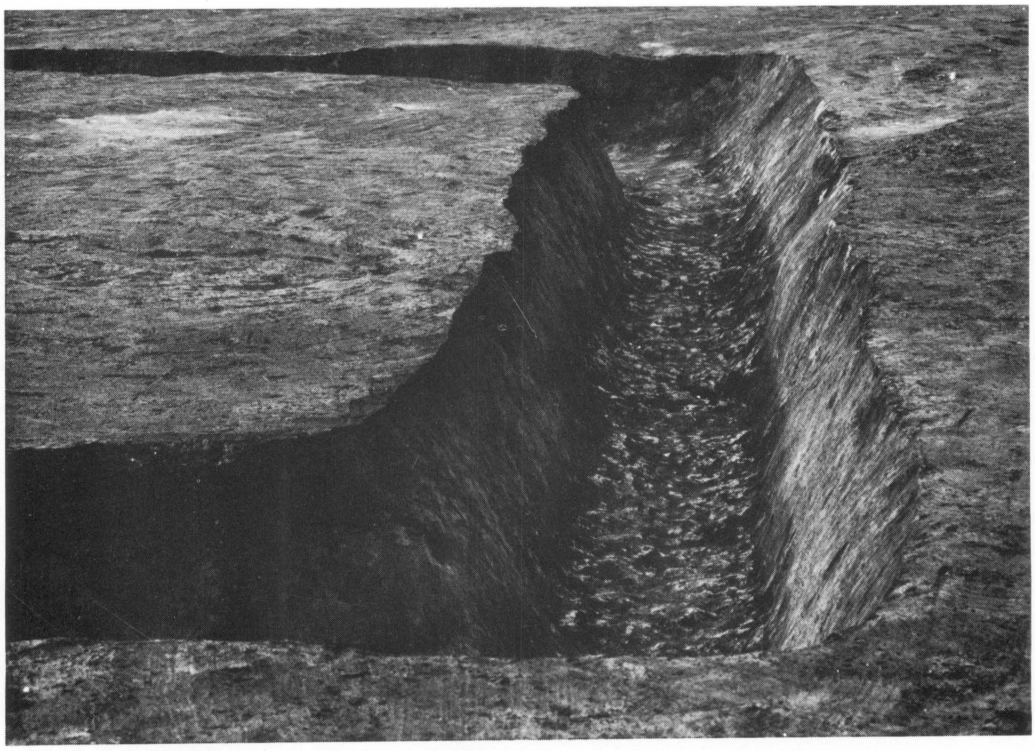
2．調査後全景(南より)

方形周溝状遺構(002)

図版八

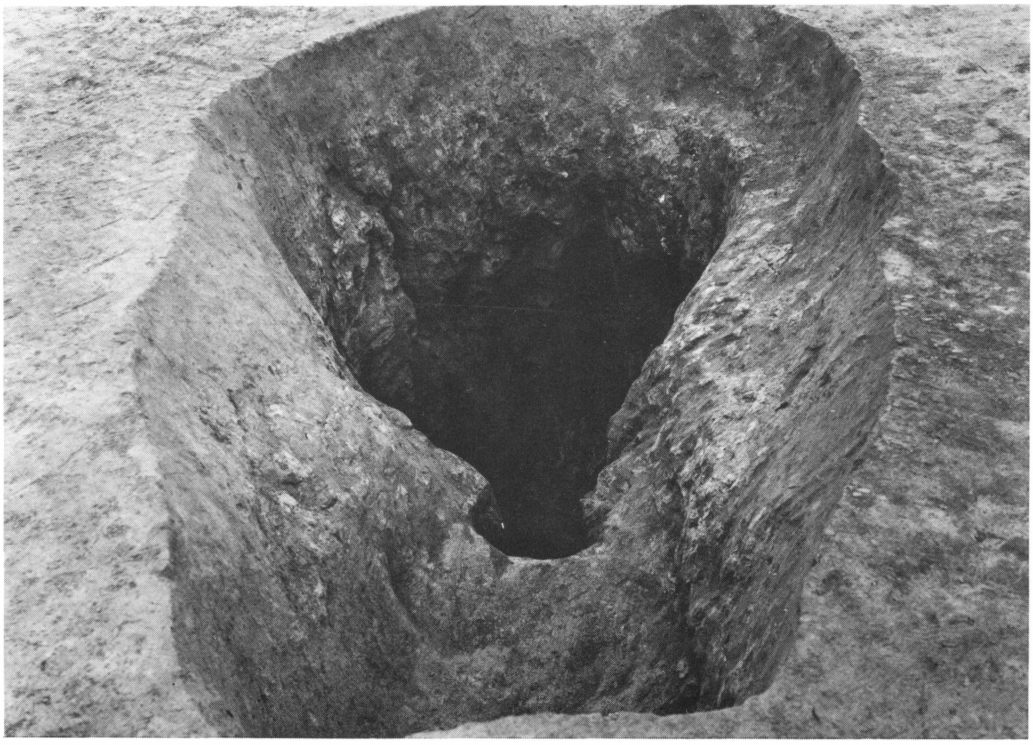


1．全景



2．東側周溝

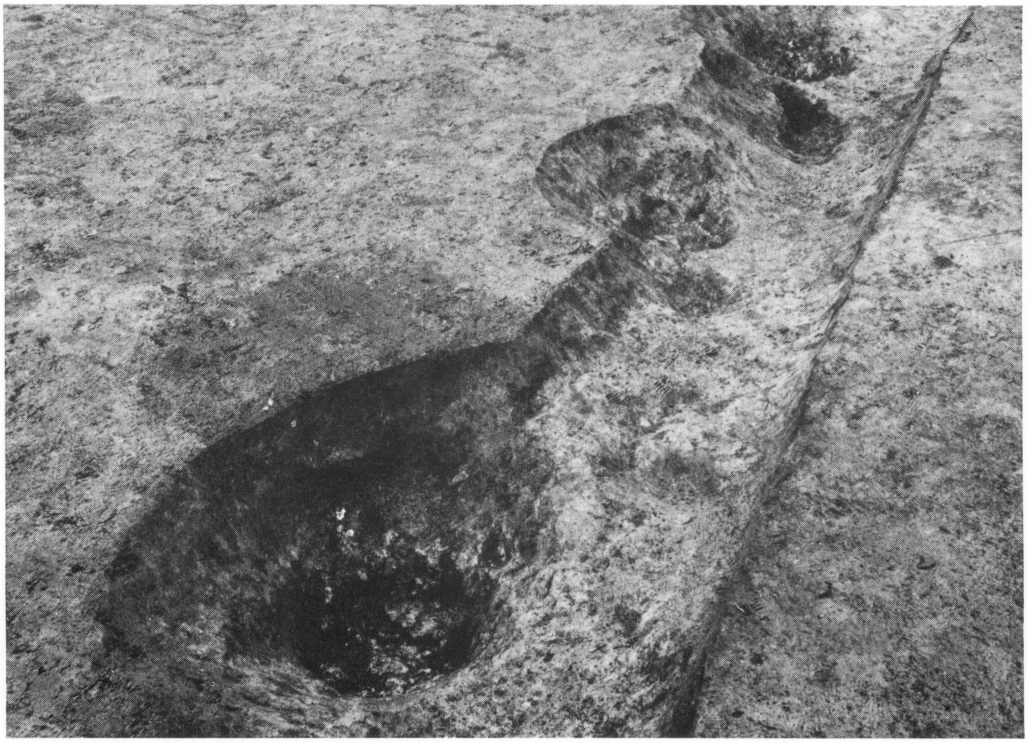
1．全景



2．中央部土壙

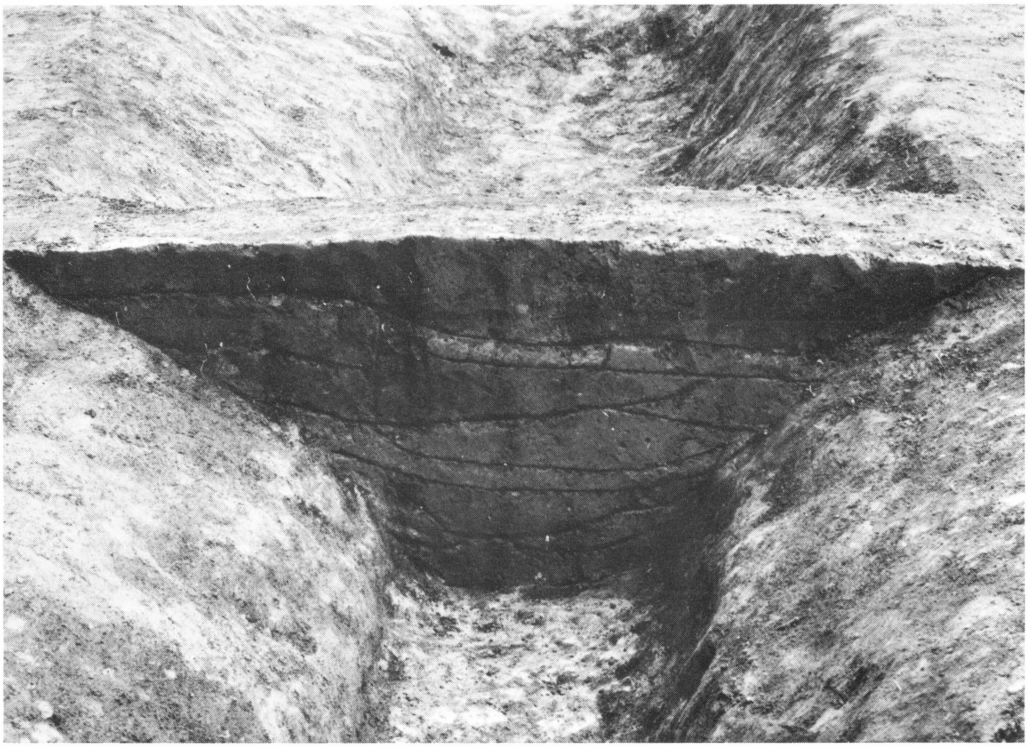
土壙・溝

1．土壙(007)全景



2．溝(006)西側

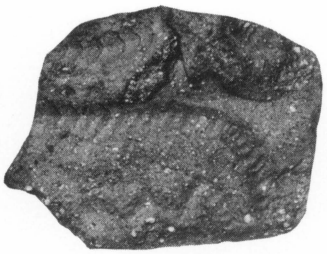
1．全景



2．土層断面

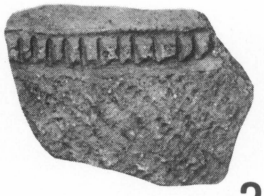
遺物

図版十二

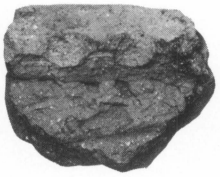


1

2



3



4

5

9

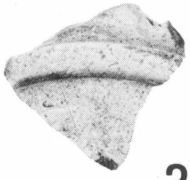
6

7

8

2

1



3

昭和57年１月25日　印刷
昭和57年１月30日　発行

千葉市大膳野北遺跡
－千葉県立身体障害者職業訓練校建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行　千葉県商工労働部
千葉県千葉市市場町１－１
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻１－３－13
電話　0472－25－6478
印刷　株式会社ヤカ東京工場
千葉県松戸市田中新田５－５